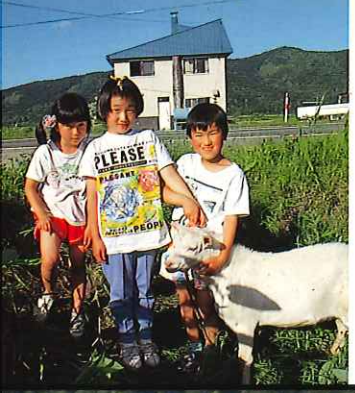


[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

No. 5

'93秋冬号

特集 新しく農業をはじめる

新規就業者たちの生活と意見

DePOLA NO.5 でぽら●もくじ

特集

新しく農業をはじめる

新規就業者たちの生活と意見

都市生活やサラリーマン生活をやめて、一家で田舎へ移住、新しく農業をはじめる人が少しずつ増えている。若者の農業離れや農家の高齢化が深刻な農村にとって入植者は大歓迎。新規就農希望者の相談や斡旋を行ってきた農業会議所に加えて、最近は各県や市町村でも彼等の受入れに力を入れはじめた。新農民たちの奮闘生活をルポする。

楽しい農業、教えます「四国肱川皆農塾」は、ただ今塾生13名——3
若いふたりの「きさらぎファーム」(愛媛県肱川町)——8

(熊本県のアグリ・エイターたち)

阿蘇の里にロマンと自立的経営をめざして(木之内均さん)——9
10種の無農薬野菜とアイガモのいる水田作り(南崎哲夫さん夫妻)——11
農業を担う若い女性を育成中(第三セクター「新和」)——14

(北の大地で自立経営)

人生の節目に米づくり(土居健一さん)——16
リースでスタート、念願の牧場を持つ(宮原信孝さん)——18
マイペース、趣味的発想で(柳田友之さん)——19

●カラー紀行

高原の山里に魅せられて/小谷村「土魂塾」——21
人と自然の和ごみの里[散居村]——35

●都市からふるさとへのメッセージ

いま、リゾートオフィスが新しい——25
オフィス分散化への第一歩/八ヶ岳リゾートオフィス

●エッセイ

町おこし、村おこしの差別化を/渡辺文雄——28

INFORMATION——30〜34
新しく農業をはじめませんか!

[全国農業会議所・新規就農ガイドセンター/北海道農業青年人材銀行/岩手県農政部「就農相談Q&A」/都道府県の新規就農の支援活動/新規就農者の受入れ体制のある市町村等一覧/全国県立農業大学校一覧他]

「でぽら」(DePOLA)とはDepopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として『でぽら』をお届けいたします。

表紙/北海道幌加内町に入植した吉成さん一家。 カメラ/田中康弘

元気に大地を歩き廻る皆農塾のトリたち。

特集／新しく農業をはじめる①

楽しい農業、教えます

四国肱川皆農塾はただ今、塾生13名

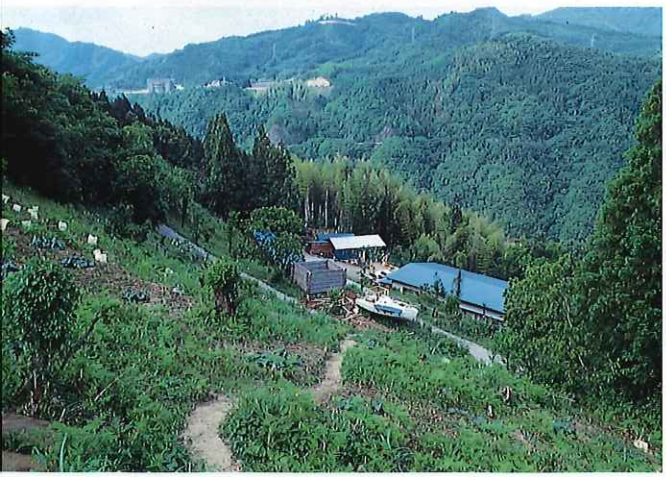
「楽しくなければ農業ではない」「明かるくなければ百姓ではない」――そう言い切って、それを見事に実践している農業塾があった。

全国から集まってきた研修生、ただ今13名。東京、埼玉、千葉、福島、大阪、奈良、神戸、広島、日本各地から集まった研修生たちは、十人十色の個性派ばかり。「どうせやるなら楽しめる農業を」という、坂根塾長の農業哲学に惹かれて、意欲と好奇心にあふれた面々は、四国肱川「皆農塾」の門を叩いた。

山の斜面を上手に生かして

「皆農塾」を訪ねて、四国松山へ飛んだのは六月初旬。松山から肱川へ向かう国道沿いの田んぼには満々と水が張られ、緑濃い山々をその水面に映している。松山から伊予市を抜け肱川の町に入ると、山道の間から鹿野川湖が見えてきた。その鹿野川湖を左手に見ながらクルマは急斜面をジグザグに登っていく。雪でも降ったらこの道はどうなるのだろうと、余計な心配をしたくなる程の急坂だ。杉木立の中をなおも登ると、ようやく「皆農塾」の建物が見えてきた。

旧郵便局を移築したという研修所の建物が左手に、右手の斜面には鶏舎が並び、さらに上の方には畑が広がっている。山間の地形をうまく活かして、変化に富んだ独特の農場風景をつくり



だしている。

塾生たちは昼食を済ませ昼の休憩に入ったところらしい。どうも静かだと思ったら、誰もが昼寝のまっ最中なのである。研修所向かいの作業所から、若い塾生が二人出てきて、「とりあえず」と言って、上の畑を案内してくれた。

21歳の永田君は岐阜の短大を終えて、22歳の稗田(ひえだ)君は福岡の経済大学を卒業してやってきたという。

「食うことは生きる基本だし、それを学ばうと思って、二ヵ月前に来ました。でも、ここの研修を終えたら、もう一度社会に出て、それから最終的には農業をやろうと思ってます」と稗田君。

カボチャの苗が雑然と植えられた急な斜面を登っていくと、三六〇度視界が開けた広い台地に出た。遥か向こうにゆったりとした山並み。見下せば鹿野川湖のエメラルド色の水辺が絵のようだ。

畑には大根、ほうれん草、アスパラなどが、六月の陽をあびて元気に育っている。畑の一角に仔牛が二頭、隣では大きく肥った豚が行ったり来たり。

「コイツ、食糧になるんですよ、もうじき。オレたちの……」

永田君が優しいまなざしを豚に向けた。

自給自足が「皆農塾」の原則である。永田君と稗田君の二人は、今夜、夜釣りに出かけて、明日の夕食用の魚を釣ってくるのだという。クルマで一時間も走れば、太刀魚や小魚の釣れる宇和島湾や瀬戸内海に出られるのだ。自給自足の暮らしには、もってこいの恵まれた立地なのである。

山茶（フキ）も大切な食料になる。

加藤君お気に入りのヨットの家。彼はここで寝起きしている。

作業の合い間のお茶の時間。コレが楽しい。左から4人目が坂根塾長。

ほどほどに食っていける百姓
坂根塾長の農業哲学

「皆農塾」はその入塾案内のパンフレットによると、「農業技術と並行して農業思想を探求し、自立農民を志す人のために開かれた塾」で、一年間研修生、短期研修生（一週間以上）などを受け入れる。一年間研修生の場合、入塾費が5万円と研修費（食費、宿泊費含む）15万円。計20万円を塾生は納めることになるが、逆に考えると一年間20万円で、光熱費などの諸経費も含めて、一人の人間を食べさせなければならないということだ。

そこには当然さまざまな創意工夫が必要となる。

研修所に戻ると、昼寝から覚めた塾生たちの爽やかな顔が一人、二人と集まってきた。そんな塾生たちに混じって、藍染めの作業衣の良く似合う坂根塾長も現われた。

「さぁ、みんなでお茶でも呑もうや」という塾長の掛け声で、湖を見渡す庭のテーブルで、賑やかなお茶の時間が始まった。

「四国肱川皆農塾」は今から四年前、坂根塾長と塾生によって開設された。坂根塾長はそれまで埼玉県寄居で「寄居皆農塾」を三年主宰、「皆農塾」の歴史はトータルで七年になる。

「皆農塾」開設のキッカケとなったのは、塾長の書いた一冊の本だった。87年に出版された『都市生活者のためのほどほどに食っていける百姓入門』というのがその本で、これを読んだ農業志願者たちが、坂根氏のもとへ集まってきた。

〝ほどほどに食っていける〟という視点が何よりも新鮮だったし、現実味をもっていた。それまでの農業はと言えば、効率本位の農薬漬けのような農業か、精神論に偏りすぎて実際には食べていくのが難しい有機農業かの両極端がほとんどだった。

独自の農業哲学に裏打ちされた坂根氏の方法論は、多くの農業志願者たちの心を捉え、「皆農塾」開設となった。

その坂根氏の方法論とは、まず平飼いで鶏を飼い有精卵を採ること。平飼いの一番のネックは、土中のコクシジューム原虫卵をついばむことによって起こるコクシジューム症という病気だが、この菌が寄生しやすい生後二、三カ月の間だけ、ヒナを地面から離すというやり方で、克服している。

この有精卵は一コ40円という価格で売られ、塾の生活の基盤になっている。

さらにその肉はブロイラーの肉と異なり、風味も良く肉もしまり高価格で消費者の手に渡る。そして鶏糞は地面で微生物によって分解され、無農薬野菜の栽培には欠かせない肥料となる。

一コ40円という卵だが消費者に人気があり、安全でおいしいと好評だ。

今日は朝から産直用野菜セットの発送準備。

野菜セットには季節の野菜の他、あざみなど野の花も。

田起し作業の途中。トラクターの調子が悪くて手間どった。

無農薬野菜のセット売りという販売も、必然的に生まれたもので、同じ種類の野菜を沢山作ると、たちまち害虫の標的となることから、色々な野菜を同時に作り、その時期に穫れたものを10種類内外でセットにする。

坂根塾長の編み出したこの方法は、無駄がなく無理がなく、多くの消費者に共感をもたれる産直となった。

農業をやるからには楽しくやりたい。この「皆農塾」では、生産者である自分たちが主導権をもてるこんなやり方こそ、本来の農業なのだと誰もが考えている。

「農業をやりたい人は確かに今増えていますね。しかし、行きあたりばったりでどこかの農場に入り、つらい農業しか覚えない人が多いんですね。やればやるほどつらくなる。それは市場原理が働く中では当然のことなんです。農産物というのは沢山作れば作るほど価格は下がる仕組みになっている訳ですから。そういう構造の中に組み込まれたら、楽しい農業なんて成立する訳がないんです」と坂根塾長は言う。

塾生たちの頼もしい"親方"、坂根塾長。

神戸からやってきた堀田さん夫妻、動物好きだ。

今朝は金野さんが採卵を担当。

手作り鶏舎の前で。きさらぎファームの浜田夫妻

13名の塾生、農業に夢を托して

現在この「四国肱川皆農塾」には13名の塾生がいる。

最年長の金野さんは44歳。東京赤坂の不動産会社を脱サラして、この4月から塾生となった。特に農業が好きだったという訳ではないが、環境破壊の一方的な加害者としてしか生きられない都会の暮らしに、ずっと疑問を感じていたことがここへ入塾した大きな動機になっているという。

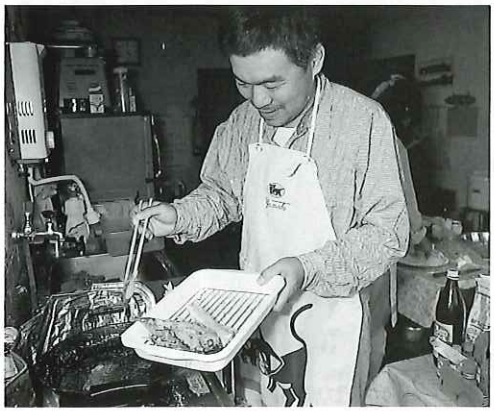
41歳の堀井さんは関西の大手電機メーカーで半導体の仕事をしていた人だ。いずれは関西に残してきた妻と娘を呼び寄せたいと考えている。そして神戸から脱サラしてきた堀田さん夫妻。シンプルな暮らしをしたかったという夢の実現に向けて、頑張っているステキなカップルだ。

野菜、卵の出荷作業。

奈良県からやってきたもう一組の堀田さん夫妻は、肱川町の町営住宅に住み、妻は肱川の役場に勤めている。「ここで5年位頑張って、子供を3人位作りたいんです」と意欲的だ。

永田君は小説家志望の21歳。ここでの生活を記録している。相川君は24歳。東京の農業会議所でここのパンフレットを見て、大学を辞めてきたという。

広島県呉市からやってきた堀さんは27歳。東京の多摩美術大学の彫刻科を出て、会社勤めをした後、彫刻と農業で自給自足の暮らしをしたいと入塾した。最初に畑を案内してくれた若者、稗田君は、来月、消防士の試験を受けるのだという。



今日は新入りの堀井さんの初めての夕食当番。

「皆農塾」には19歳という塾生も2人いる。そのひとり加藤君は東京町田の出身。〝少年〟というニックネームが良く似合うあどけない顔立ちの若者だ。ここへは高卒後、一ヵ月研修のつもりで来たが、居心地がよくて、このままずっと居たいのだという。

もうひとりの19歳穂積君は、福島から東京に出て一年間新聞配達をした。日本にはモノや食べ物が溢れているけれど、世界の何十%かの国では今日も飢えや寒さで人が死んでいる。自分にはどうすれば良いのかすら分からないけど、モノを持たずにシンプルな生活をしながら、そういう事を考えていきたいと、しっかりと語ってくれた。

24歳の渡辺さんは5年間いた大阪の大学を卒業して自主的にここへ来た。いくつかの農業塾を見学したけど、ここがいちばん自然で楽しそうだったという。

古賀さんは広島で広告代理業を営んでいた29歳。年間60日も働けば食べていけたという生活から、地味で汗を流して僅かな収入という、そんな暮らしに何故か魅力を感じたという。

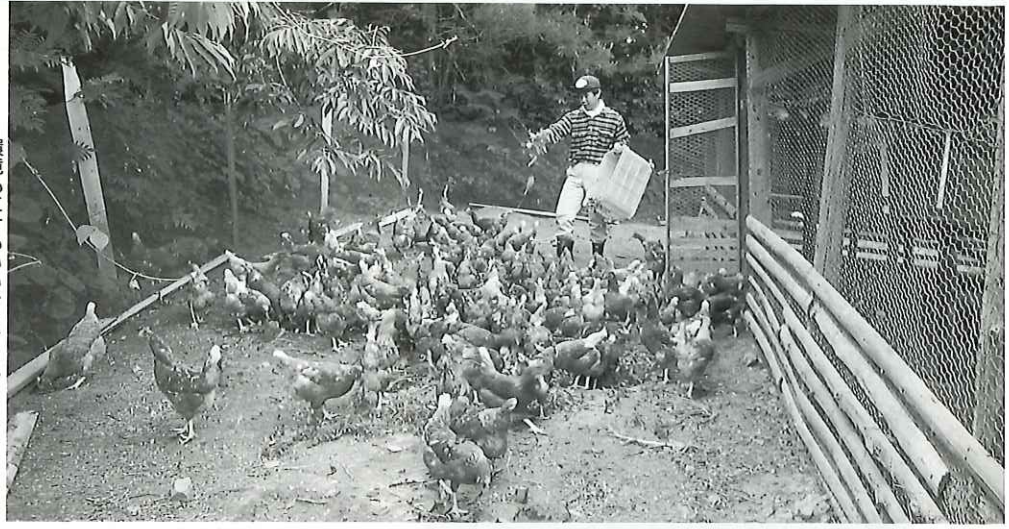
楽しい笑い声の絶えない「皆農塾」だが、その笑い声の中心にはいつもこの古賀さんがいる。

一人ひとりが本当に輝くような個性をもった塾生たちだが、かつての塾生の中には、農林水産省の技官だった人や、東京日本橋で呉服屋を営んでいた69歳のおばあさんなどもいたという。

今ではそれぞれが農業でちゃんと自立して、立派なお百姓さんになっているという。

「皆農塾」では研修終了後の塾生たちに対して、肱川町役場と一体となり、農地の取得や借り入れを全面的にバックアップするよう協力している。

ご飯は一日4升炊くという大食漢揃い。



環境もエサもいいから、アルカリ質のいい卵を産む、きさらぎファームのトリたち。

若いふたりの「きさらぎファーム」

（愛媛県肱川町）

出産間近かの豊美さんも作業を手伝って。

浜田純司さん（25）・豊美さん（26）夫妻は、「四国肱川皆農塾」から巣立って独立した若い農場主だ。同じ肱川町で去年の7月から「きさらぎファーム」を経営している。

山間の傾斜地2、400坪を県の農地公社から借りて、200羽の鶏を飼い、畑ではトマト、ナス、ピーマン、ししとう、キャベツ、レタスなどを作っている。

浜田さんは大阪の短大を出た後、山梨県清里の障害者福祉作業所で「一年間ボランティア計画」に参加した。ここで浜田さんは養鶏、養豚などを含めた本格的な農業を体験し、さまざまなノウハウを身につけた。特に養鶏は3、000羽の鶏を平飼いで飼っていたので、鶏の生態や病気にも詳しくなり、自信がついたという。

ボランティア活動を終えて、神戸で一年半ほど資金づくりのための会社勤めをし、「皆農塾」へやってきた。ここでさらに坂根塾長から、有機野菜づくりや、実際に食べていくための方法論を学び、長年の夢だった独立へとこぎつけたわけである。

独立のために準備した資金は200万円。肱川町からは三年で100万円の補助金ということで、今年分35万円が支給された。しかしこれは現金で受けとれるものではなく、農協の口座に振り込まれ、ここから飼料などを買うたびに引き落とされるという性格のものである。

住宅は「皆農塾」のバックアップもあり、家賃2万1000円という新築の町営住宅を借りることができた。ここは風呂・トイレ付き3DKで、農場からも近く、快適そのものの生活拠点だと二人はニッコリだ。

八月には待望の赤ちゃんが誕生するという。

生まれてくる赤ちゃんのためにも、これから農場としての経営基盤もしっかりと築いていかなければと、純司さんには新しい課題が生まれた。

「今、野菜の方は、関西のある料亭と取り引きができているんですが、卵はまだ個人に少しずつという段階なんです。ウチのトリはご覧のように山の上の空気の澄んだ気持のいい環境の中で育ってますから、もの凄く健康だし、とってもいい卵を生みます。この卵を一度食べた人は、必ず買っていってくれるんですよ」

と純司さんは自信をもって自分の卵を勧める。

確かに畑もトリたちも健康優良児のように元気がいい。純司さんがひとりで作ったという広い鶏舎の中で、平飼いのトリたちは好き勝手に遊び廻り、よく動き、よく眠る。

爽やかな風が吹き渡る浜田夫妻の「きさらぎファーム」は、「皆農塾」という頼もしい鶏から生まれた、新鮮な卵そのもののように、力強く輝やいていた。しかし量産卵と差別化して独自の販路を確立するまでの道のりは決してラクではない。

●産直セットお届けします

●皆農塾

・年4回1万1、000円（送料別）
　野菜セット＋卵1パック（10コ）
・1回限りのスポット便はギフトに最適3、000円（送料別）

電話0893(34)2353
愛媛県喜多郡肱川町硯「四国肱川皆農塾」

●きさらぎファーム

電話0893(34)3775
愛媛県喜多郡肱川町大字大谷1786
「きさらぎファーム」浜田純司

（撮影／藤田良雄　文／金山淑子）

特集／新しく農業をはじめる②

［熊本県のアグリ・エイターたち］

熊本県では若い農業者入植促進事業「くまもと農業アドベンチャー計画」を策定、平成3年度より新規就農者の相談、研修、受入れ町村の斡旋等を行っている。農業経験10数年のキャリアを持つ木之内さんと、一年生の南崎さんを訪ねてみた。

ハウスにて。左から吉田君、山内さん、勇樹ちゃん、さゆみさん、香奈ちゃん(1歳)、木之内さん。

阿蘇の里にロマンと自立的経営をめざして

熊本県長陽町 木之内均さん

熊本空港からクルマで約30分、阿蘇山の雄大な姿が間近かにせまってきて、右手には外輪山の原生林が続く。長陽町立野という看板をすぎてしばらく行くと国道の下の方にビニールハウス群が見えてきた。これが木之内均さんの経営する木之内農園だ。

ハウスでは3月までイチゴを作り、イチゴ狩りは阿蘇観光の一翼を担っているが、いまは出荷を待つメロンが芳醇な香りを放っている。

ハウスの脇にある事務所で、木之内さんは作業の合間をぬってパソコンと向き合っていた。

平成3年度の熊本県農業コンクールの農業新人部門で表彰されるなど、九州地区でも注目される〝新規就農者〟の旗手。事務所の壁にはいくつかの表彰状が掲げてあった。

念願かなって昨年やっと購入したというハウス用農地は1㌶あり、他に借地して耕作している畑が1㌶、水田が3㌶、合計5㌶を耕作する本格的な自立経営農家である。

しかも、農業をやりたいという若い人を受け入れて農業への夢を語り、月給・ボーナスもしっかり支払って、農業で食べていけることを実証した。

東京育ちの31歳。話し出すと標準語がどんどん飛び出してくるスマートなハンサムボーイ。阿蘇の里に降りてきた宇宙人のような人だ。

大学時代の仲間と農業体験

木之内さんは川崎市生まれ。東京・町田市に引越し、小学校から高校まで町田市で育ったが、小さい時から動物や植物が好きで、大学は地方にある農学部に入りたいと思ってきたという。

「小学生の頃はずっと動物の飼育係をしてました。町田も昔は水田も畑もあって自然が豊かだったのに、東京のベッドタウンになり、どんどん変わっていく。毎日のように転入生が入ってきて、最初3クラスだったのに卒業の頃は10数クラスになっているという状況でした」

たまたま九州東海大学に農学部が新設されると聞き迷わず応募、入学した。

大学では農学部といっても一般授業が多いので農業をやろうという直接的な引金にはならなかったが、二年の時仲間と郊外に農家を借り、農業をやり

水田の中に点在するビニールハウスが木之内農園。

ながら学校へ通った。その時の体験や仲間たちとの交流が、阿蘇の地で農業をやることを決意させた。

さらに卒業後は、海外の農業事情を学ぶため、一年間ブラジルへ留学した。「日本から渡った人達が苦労しながら農業で頑張っているのを見て、これなら日本で充分やっていけると思った」という。いま木之内さんのところに入門した若い青年の一人にも「ブラジルへ行って苦労してこい」と送り出している。

日本が豊かな自然環境を持ち農業技術や流通面でも恵まれているということを農家の人自身が忘れているのではないかと木之内さんは思っている。苦労が多いのにブラジルの農民の顔はみな明るく陽気だった。

金をためて中古農機具を買う

「しかし見知らぬ土地で都会からきた若僧が農業をやるということは大変でした。お金はない、土地はない。いまのような就農希望者のための窓口もない。大学時代の仲間にたのんで休耕田などを借り、夜アルバイトしてためたお金で中古の機械を少しづつ買っていきました」

結果的にはそれがよかった。借金ゼロ、やれる範囲で少しづつ広げていく。現在のビニールハウスのパイプもほとんどが中古品だそうで、設備費は一般農家の半分以下だろうという。

一方、せっかく作った野菜も農協を通していないので市場では取引きしてくれない。そのために産地直送、消費者に直接手渡す方法を考えた。

長陽町でビニールハウスによるイチゴ栽培を開発したのは木之内さん。阿蘇観光のルートになっている国道に近い場所に農用地を求めたのも「イチゴ狩り」をメインに考えてのことだった。

おかげで、木之内農園は、11月から3月にかけて観光客でにぎわい、延4500人が訪れる。

イチゴが終るとハウスはミニトマトとメロン（ホームランメロンが6～7月、アールスメロンが9～10月）、畑ではスイートコーンが作られる。

これらの大半はオーナー制度をとり消費者へ直送される。

「周辺は牧場が多いので、その堆肥をもらって有機質な土を作ります。国道も年3回草刈りをしますので、その草も全部いただいて堆肥にしています。農薬はほとんど使いません」

高冷地阿蘇ならではの昼夜の寒暖の差も影響し、木之内農園の果実・野菜は安全でおいしいと好評である。

家族、地域って本当に大切

木之内さんの家族は、奥さんのさゆみさん（24歳）と3人の子供たち。それに従業員、見習生が3名とにぎやか。

さゆみさんは地元の女性で、農繁期に手伝いにきてくれたことから知り合い5年前に結婚した。子供は元気にのびのび育てたいという方針どおり、4歳の長男勇樹ちゃんは、素足で走りまわり、しばらく姿を見せないと思ったら、泥んこ、びしょ濡れになってニコニコして帰ってきた。

自宅は目下村営住宅の借家だが、奥さんも農園にある家にやってきて、みんなの昼食を作るなどとても忙しい。

「女房の実家があることでずい分助かっています。結婚して子供ができ、近所づき合いにも極力参加していくことで、僕もやっとここの人間になれました。田舎は信用問題が大切だし、何かあれば助けてくれるのは地域の人達です。損得なしに協力してくれます」

広いハウスにビニールを張りかえる時は、風のない日を選んで手際よくやることが大切。200～300kgもあるので、一人や二人では一日かかる重労働だが、20人も集まると数十分で完了する。

忙しい時は子供たちは奥

⬆水田作業を終えて帰ってきた橋本君と吉田君。
⬅トマトハウスで作業する木之内さん。

さんの実家が面倒をみてくれる。

その代り、木之内さんたちも近所の農家の仕事には助っ人に行く。いまでは若い農業者が何人かいる木之内農園は貴重な存在で、3㌶耕作している水田の多くが不在農家や高齢農家から委託されているもの。消防団、青年団など何もかもやっているので夜の会合も多いこの頃だ。

農業に夢を持つ若者たちの拠点に

木之内農園で働く若者たちは、大学の後輩で、協同経営者的存在のベテラン山内吉仁さん(27歳)。彼は沖縄出身だが、将来もここで働き続けていきたいと言う。

さゆみさんの弟の橋本力さん(24歳)は木之内さん夫妻の影響を受け県立農業大学を卒業、農業一本でやっていこうと木之内農園で働いている。

今年3月に東京農大を卒業してやってきた吉田達君(22歳)は東京っ子。じか足袋におしゃれなジャケットを着るというスタイルがいかにも新人らしい。見習生としての感想を聞くと、「農業の大変さがようやくわかってきました」と語る。

彼らの給与は三食付きで手取り15万円。この倍は出したいというのが木之内さんの気持。他に夏と冬はボーナスも支払う。休みもできれば週一回以上をめざしているが、農繁期はそれがむずかしいため手分けして夏休みや冬休みを長期とるようにしている。

給与を支払い安定的に経営していくことは大変で、厳しい状況にあるが、「農業でも食べていけると信じたいし、食べていけるようにしないと。事業として捉えると、従来と違った方法やアイデアも生まれてきます。常に模索中ですが、それがまた楽しみなんです。

個人個人の価値観が生かせて、しかも一つの目標に向かって皆んながまとまり、子供たちは働く親たちを見ながら育っていく――農業が一番です。ダメだと言われ続けてきた農業ですが、食糧問題は今後最も重要視され、農家でよかったと思える時代になるはずです」

木之内さんは、あらゆるデータや顧客リスト等をパソコンに入力している。

「ひとが5年かけて学んだことを私は一年でやりたい。データを持っていることがこれからさらに大切になると思います」と語っていた。

眼下が南崎さんの耕作している畑。

10種の無農薬野菜とアイガモのいる水田作り 農業一年生健闘。

熊本県清和村 南崎哲夫さん夫妻

南崎哲夫さん(45歳)夫妻が入植した清和村井無田地区は、村の北部に広がる丘陵地帯で、村の中心部からは山を一つ越える。夏でも涼しいので高原野菜の産地として知られるが、冬の寒さは九州の中でも一、二だそうで、そんなせいか集落を下りて市街地へ行ってしまう若い人が多い。

南崎さんと洋子夫人(42歳)は、昨年3月に熊本市からこの地区に入村してきた。

いま遊休地の水田約70アールと畑90アールを借りて、徹底した無農薬栽培に取り組んでいる。

集落のはずれの方の谷間の小高い場所に二軒の農家があった。奥の家が南崎さんの借りた家。手前の家の庭先では牛たちを飼っていて、生まれた仔牛たち二頭を含む牛のファミリーがもの珍しそうに我々を迎えてくれる。

南崎さんは、丁度トマトなどの夏野菜の植付けで忙しいため寸時を惜しんで畑仕事に出かけており、待っていてくれた夫人がスクーターに乗って、我々の来訪を伝えに行ってくれた。やがて愛車、軽トラックに乗って南崎さんが帰ってきた。

「本当は畑や田んぼに近い場所に住まいが欲しかったんですが、そうはいかなくて。ここから畑まで歩くと40分ほどかかりますが、車なら十数分で行けます。でも台風や豪雨の時は辛かった。苗が全部倒れているのではないか、流されちゃったのではないかと、心配して一晩中まんじりともできませんでした」

農業一年生の夫妻には未知数のことが多いが、作物や自然とことん向き合うことで、野菜生産もまずまず順調にスタートしている。

3ヵ月で農業開始を決断

南崎さん夫妻は、誰か俳優さんを思わせる美男美女。一年間ですっかり陽焼けしたというその顔は大変魅力的だ。

「わざわざお金を払ってゴルフやスポーツクラブへ通わなくても、タダで極めて健康的な生活を送っています」と笑う。

熊本市生まれの非農家。大学は商学部で、卒業して地元の流通関係の会社などに就職したが、生涯を通じて打ち込める仕事という気持ちになれなくて三回ほど転職した。

企業人間としてあくせく働くより自然の中で人間らしく生きたい。環境問題や公害問題も気になる。

ご主人のよき理解者であった夫人が自然食品の店で働くようになり、農業への関心が高まった。

「食物だけは安全なものを食べたいと思ってきましたが、たまたま一昨年、県が新規就農者の育成と農業の振興策としてアドベンチャー計画という企画を発表したのが目にとまったんです。消費者の立場でなく生産者として安全食品づくりに関わりたい。そのためには体力のある今しかないと応募したんです。

農業大学や県の農業研修所で約一ヵ月間研修し、3ヵ月後には県の斡旋でここ清和村に入植することに決まりました。研修では実習より講座が中心で、苦労するなという気はあったんですが、失敗してもともと決断したんです」

清和村の美しい自然環境が気に入った。清和は「文楽の里」として知られるように、古い文化や伝統も残り、人情の厚い村でもある。

県の斡旋で休耕田や遊休畑などを借りた。家は村役場の紹介で空農家を10軒ほど見てまわり、畑とは離れているが、景色のよさと建物が比較的新しい(築20年)ことで、現在の家を借りた。

家賃は月2万円、田畑の借用料は新規就農事業として県が5年間助成してくれる。

8年前から空家になっていたという家だが、南崎さん一家が手入れして住むようになり、見事に甦った。夫人の都会的センスのよさがそこかしこに生かされて、明るく快適な住まいだ。夫妻の一人っ子である長男大作君は、今年4月に人吉市の高校に入学、同市にある洋子さんの実家に住んでいる。

「父母二人だけの暮らしでしたので、孫の同居で両親は大喜びですが、私の方は淋しくて……。子離れの勉強中です」と洋子さん。

居間の一角には、南崎さんが勉強中の農業の専門書が沢山ならび、その近くには家族や親しい人達のスナップ写真がいろいろ貼ってあった。今までの都市生活では気づかなかった家族や夫婦の大切さを感じているようだ。

アイガモはみかん畑の草とりに

さて、南崎さんの農業ぶりを拝見しよう。水田は70アールを借りたが、昨年耕作したのは約30アール。苗代作りと田植え、稲刈りには機械が必要なので、村の機械銀行に頼んでオペレータ付きで作業をしてもらった。

苗が成長した田にはアイガモを放した。おかげで田草とりは一度もせず、農薬を使うこともなく、立派に稲穂をつけた。

今年も家の軒下にアイガモの雛たちが30羽ほど水田へ放たれる日を待っていた。昨年は10軒ほどの農家がアイガモ放飼をしたが、今年は倍近くに増えそうだという。

それで役目の終ったアイガモは?と聞くと、

「草とりの仕事をしてくれて肉にするのは虫がよすぎるし、可愛いものだから殺すのはしのびなくて。みかん畑で雑草とりに欲しいという人がいたのでもらってもらいました。毎年、若い雛でないといけないというのが欠点ですが、放っておいても稲の成長に合せて立派なカモに成長するんですから感動的です」と南崎さん。はじめて作った稲穂を一本大切に保存している。

夫妻の案内で、南崎家の畑へ行ってみた。

林と河川の間に広がるなだらかな丘陵地を90アール耕していて、セロリ、レタス、大根、アスパラ、スイートコーン、トマトと、何でも一通り作っている。

昨年は10種の野菜を作ったというから、農業一年生にしては上出来だ。トマトは虫がつき病気になりやすいため失敗したが、ミニトマトは鉢植えにして配ったところ好評だった。アサガオのようにツルをきれいにまいて約1mの高さにしたもので、一鉢あれば約3カ月間、無農薬で完熟したトマトが毎日思い切り食べられるという。

これら南崎さんの作る野菜は全く農薬や化学肥料を使わない。

「できた野菜は県内の無農薬野菜を売る店やグループに直売していますので、責任のあるものを作りたいと思います。第一農薬を扱う位なら、少し手間がかかっても手で虫退治した方がラクです。効率からいえば単品種で大量生産がいいのでしょうが、そうなると販売方法を検討したり、連作障害も考えないといけない。ここは夜かなり冷えるので、害虫の発生が少ないんです」

よく手入れされた畑で、雑草も少ないようだが、

「とんでもない。毎日雑草との闘いです」と語る。マルチビニールも導入して、苗の育成と雑草防止にも当たっているが、昨年の夏はせっかくはったビニールが強い風ですべて飛び去るというアクシデントもあった。

「はじめはクワ一つ使うのにも苦労したものですが、イヤだって感じたことは一度もありませんね。少しづつ欲がでてきて、朝は6時から一時間草刈りしてきて朝食。何を食べても旨いけれど、野良仕事を終えて飲むビールのうまさは格別です」

と南崎さんは畑の土手に立ち、旨そうにタバコを吸う。家の中では吸わなかったが、畑では、ひと仕事のあとの一服がよく似合う。

「手間をかければ野菜はそれに応えてくれます」という洋子夫人は、畑でもじっとしておらず、よく働く。「農業をやりましょう」とご主人をたきつけただけあって、家事も料理もこなしながら、農夫(婦)としても有能。今まで一度もグチを言ったことがないそうだ。

冬期間も働ける農業を

南崎さんは、できた野菜はクルマで一時間半かけて熊本市の契約店や個人・グループのところへ届ける。まだ経営的には成り立っていないため、貯金を喰いつぶしているが、「覚悟していたこと」とあまり気にしていない。

県の新規就農事業活用に当たっては、5年間は継続してやるよう定められている。

「ここはとてもいいところですが、冬は寒くて農業ができません。冬期間をどうするかが問題で、施設などを作ってやるには資金や技術が必要です。できれば九州の中でも暖かいところへ移動して果物作りなどをやってみたいと思っているんです」

〝農業で出稼ぎも悪くない〟と考えている南崎さんだが、全体的には農業をやりたい人がやれる環境はまだ整備されていない。熊本県のアドベンチャー事業に参画し、新規就農事業を受入れている町村もまだ10町村程度だ。

「後継者事業にはどこも熱心に取り組んでいるのに、新規参入は法律的な制約も多くてとても大変。現実には後継者不足はますます深刻で離農が増えています。農業をやりたい人を積極的に受け入れる風土や農地の活用法が必要ですね」

と南崎さんは語っていた。

今夏は長雨と低温で、野菜の収穫も半分以下になった。

ナス畑で働く4人の農業女性たち。

第三セクター「新和」開設
農業を担う若い女性を育成中
天草下島・新和町

天草半島東海岸のほぼ中央部、広大な田園地帯を持つ新和町が、平成5年4月に、第三セクター㈱新和を設立、高校を出たばかりの女性4名、男性1名を「青年農業者」として採用した。5名の農業実習生は、農業の経験はほとんどないが、講習や実習を積み重ねながら、日一日とたくましく成長している。

新しい地域農業の担い手になる人を

新和町（総面積5518㌶、人口4765人）は海の幸と山の幸の豊富な自然郷。町の中央部には二つの川が流れ、その周辺は見渡す限りの水田地帯で、天草半島有数の穀倉地帯となっている。コシヒカリの新緑が萌える田園風景は、ここが島であったことをすっかり忘れてしまうほどだ。その周辺や山沿いは野菜畑や果樹園で、温暖な気候と雨量の豊かさから何でもよく育つ。

しかし、人口の減少は農業就業人口の減少と高齢化、労働力不足を招いてきた。21世紀には農業労働力は従来の3分の2になり、その4割が65歳以上の高齢者と予想されている。

このような危機から、何とか地域農業、農村の活性化をはかっていきたいと、町と農協、農家による第三セクター、㈱新和が誕生した。

土地利用を高め、地力を復元する、農業青年の育成、高齢者が参加できる生きがい農業、消費者ニーズに対応する健康で安全な有機農業の確立、特産品づくりなどが㈱新和の施策になっている。

将来の地域農業の担い手育成等として採用したのが5人の若い農業青年。とくに、今後地域の核として、また消費生活と連携した有機野菜等を生産していくために女性たちに農業に関心をもってもらいたいと、天草周辺の各高校へ呼びかけた。

新和町役場産業振興課高田一彦課長にお話を伺った。

「若い女性でも楽しみながら取り組める農業でないといけない。そこで未経験でよいから農業に関心を持つ女性を『新和』が職員として採用し、有機野菜づくり等に当たってもらうことにしました。昨年の10月に決定して高校に募集を呼びかけたため、すでに就職の決まっていた人が多かったんですが、レポート等で農業に夢や関心を持つ熱心な女性を4名、オペレータとして機械に関心のある男性1名を採用しました」

彼らには、町役場職員と同様の給与と労働条件が与えられる。朝8時半に㈱新和のオフィスに出社、着替えて畑

中央部は天草有数の米どころ

へ出かけ、夕方は原則として5時に仕事を終える。

無農薬のシソ畑の出荷がすみナス畑で作業中という女性たちに会いに、畑へ出かけてみた。その日は10時から県主催の農業研修会に出かけるため、畑作等は一時間程度というあわただしさだったが、寸時を惜しんで苗木の手入れ等にはげんでいた。

カラフルな作業衣と陽よけの帽子、いかにも若い女の子らしく、畑の中はパッと花が咲いたように華やかに見える。

福井和美さんは新和町出身だが、あとは他市町村からの通勤。江崎千恵美さん、田中由美子さんは河浦町、大田由美子さんは本渡市で、高校では普通科、家政科で学んだ。共に今年3月に卒業したばかりの18歳。

応募の動機は、「農業に関心があるので技術を身につけたい」「兼業農家だが、家の手伝いをしたことがなかった。親が年取ったとき代って家で食べるもの位は作れるようになりたい」「新和がめざす特産品づくりや朝市などに興味がある」、「役場職員並みに給与がもらえて就業時間もゆるやかなのが嬉しい」とさまざま。まだ研修中で現場で働きはじめたばかりなので、やり甲斐とか農業のむずかしさ、楽しさについては実感できないが、肉体労働を経験していなかったせいか「足や腰が疲れて結構しんどい」、「陽焼けが心配」という反面、「来るたびに沢山の花が咲き、ナスが大きくなっていて、自然の営みってすごいなと感動します」と語る。

手入れのいきとどいた畑は、遊休地を「新和」が借りて（作業請負）、ベテラン職員たちが耕作したり地域の専業農家等に委託して豊かな農用地として甦らせたもの。

高齢者も有償で参加して

現在町内には遊休地や耕作を「新和」に委託したいという人の農用地が約60町歩あり、そのうちの3町歩を借りて、ナス、アカシソ、トマト、キュウリなどの無農薬栽培をはじめている。将来は農業法人の資格をとり、50町歩を「新和」が委託していく計画である。

「彼女たちが即戦力になるとは考えておらず、若い人達が農業に関心を持つ波及効果の方を期待しています。毎年数人づつ採用し、当面10人位の農業青年を確保したいと思っています」と課長は語る。

そのために町が重要な労働人材と考えているのが高齢者達である。

今まで高齢者というと、農地があるから、家族のためだからと無給で働いてきた人がほとんど。日本の兼業農家はこのような高齢者によって支えられてきている。

「新和」では、若い人と同時に高齢者を採用し、地域ごとに農業の手伝いができる人を確保していくよう準備をすすめている。経験と技術力のある高齢者のキャリアを有償で提供してもらい、経済的援助と共に、生きがいを持って働けるようにしていく計画だ。

町が町内の高齢者にアンケートをとったところ、217名がこの事業に「参加したい」と回答してきた。すでに28名の高齢者が月10日前後、自分の都合のよい時間帯で働いている。若い人と農業を通しての交流も生まれ、好評だ。

「新和」がつくる農薬ゼロの野菜は農協や町内の店で売られる他、県内外へも出荷される。将来は事業として独立採算でやっていけるよう、スイカ、メロンなどの作物も取り入れ、2～3億円の生産額をめざしている。

産業振興課では、都市からきて農業をやりたいという人も今後受け入れていきたいと語っていた。

・㈱新和☎0969(46)3655
・役場産業振興課☎(46)2111

報告／浅井登美子

フェリー乗場の向い側、「緑の村総合センター」の2階が事務局。

ウニ、アワビ等の獲れる豊かな海

特集／新しく農業をはじめる③

「北の大地で自立経営」

北海道の広大な自然、近代的な農業、動物たちとのふれあいに夢を託した家族たちが新規就農支援システム等を活用して入植、各地で頑張っている。その中の何人かを取材した。

人生の節目に米づくり

●土居健一さん　北海道北竜町

農器具収納庫を背景に、土居さん。

今年3月、家族と共に雨龍郡北竜町に越してきた土居健一さん(40歳)は、大阪出身。昨年、四十歳という節目に一区切りつけたいと、敢えて未経験の農業を選択した。

北海道をその地に選んだのは、去年の夏に家族で一ヵ月間キャンプをし、広大な土地と寛大な道民に親しみを感じたため。11月、大阪で開催された新規就農希望者のための「農業体験実習相談会」に参加し、自分がめざす農業について具体的なイメージをつかんだ。

土居さんの夢は「日本の米」を自分の手でつくること。そのためには生産性が高く、かつ大消費地が近い土地を確保することが絶対条件だった。それを可能にしたのが、現在の住まい、空知管内だったといえよう。また、北海道では酪農や畑作に押され、見落とされがちな稲作だが、北竜町ではそれに対する支援対策が充実していた。

神奈川大学出身。郷里の大阪で流通関係の会社に勤めていたが、数年前に独立。米づくりを事業家的視点で見ると、充分経営していけるというのが、土居さんの考えだ。

現在、土居さんを含めた4軒の農家が会社組織（集団法人）で稲作に従事している。初めての農業とはいえ、研修中の身なのでほかの家族からいろいろ教えられた、と土居さん。一シーズンを通して作業の手順が組まれているので、日曜日をお休みにすることもできる。

住いは町営農業住宅。大阪のマンション暮らしでは無理だった犬を飼い、家の敷地内で家庭菜園を楽しむ。奥さんのひでさん(40歳)は町内のマラソン大会・女子40歳以上の部で優勝するはつらつぶり。ふたりの子ども（正典君・中1、史典君・小3）もマラソンをはじめスポーツが大好きで、地域や学校の人気者。スクールバスで学校へ元気に通う毎日だ。

「いずれ独立できるように、研修期間中はしっかり勉強したい。町や農協もきちんと相談にのってくれる、いい町を選びました」

と土居さん。人生のひとつの節目に選択した米づくり、これからますます面白くなるだろう。

米づくりを集団営農で——

土居さんが実習中の共同作業所は、会社組織（集団法人）になっていて、

法人共同作業所の仲間たちと。

水田で作業中の土居さん。真すぐ機械を動かすのは結構むずかしい。

45町（水田40町、ビート5町）を経営。土居さんを含めて4家族、男子7名、女子数名が稲作に従事している。土居さん以外の家族は、車で15～20分ほどの北龍町市街地に住居を持っていて、「自宅から工場に通勤するような感じ」とのこと。

はじめて農業を体験した土居さんだが、主な作業は機械で行う上に、手のこんだ作業は見学させてもらう身分だったので、特に途惑いはなかった。しかし機械植えだけでは不充分な部分は「差し苗」で補なう。この時ばかりは二週間ほど休みなしで奥さんと田に入った。靴が抜けなくて泥んこになったが、作業の終る頃にはすっかり慣れた。

稲作は一シーズンのスケジュールが決っているので、原則的には毎週日曜日は「休日」となる。

「サラリーマンだって休日のない日がありますから苦になりません。それよりもすべてが初めての経験で、もの珍しさが先に立ち、とにかく毎日が楽しいし、思ったより楽です」

まずはしっかり研修し、来年か再来年には独立。土地の手当などはこれから町や農協と相談してから決めるつもり。

10年後にはまた家族で、今度は海外旅行に行きたいと語っていた。

〔奨励金〕農用地、農用施設の賃貸料について5年間半額を交付。固定資産税を3年間免除。
〔経営自立安定補助金〕借り入れた制度資金に対し1割、500万円を限度に交付。
〔利子補給〕制度資金に対し3000万円を限度に5年間3・5%を超える額。

上／奥さんと家庭菜園を楽しむ（町営農業住宅）
下／共同作業所外観。

新しく農業をはじめる③北の大地で自立経営

リースでスタート、念願の牧場を持つ

●宮原信孝さん　北海道白滝村

宮原信孝さん、喜代さん夫妻。

夫婦で北見の牧場に住み込み二人の子供を育ててきた宮原信孝さん（37歳）、喜代さん（37歳）夫妻が、新規就農者支援事業により白滝村に〝自分たちの牧場〟を持ったのは3年前。農地面積43町歩、初妊牛40頭でスタートした。

これらはリース形式を採用している。北海道農業開発公社が取得した離農農家の農場や施設などを整備して新規就農者などに一定期間リースしたあと売り渡すというもので、5年間リース料を払い、6年目に買い取るというシステム。北海道農業会議が昭和57年より開始し、現在までに約100家族が利用している。

宮原さんのリース農地は31町歩、村営農地が12町歩。初妊牛40頭もリースだったが、その年23頭の子牛が誕生、これは宮原さん個人の所有になる。現在は子牛（メス）が36頭になっている。

「仔牛1頭が死産、親牛1頭が突然死した以外は事故らしい事故もないのが嬉しい。畑は公社が牧草地として造成し種まきもしてくれました。機械もリースや共同のものを使ってきましたが、牧草を刈り取るロールベーラーだけは2年目に購入しました」

当初の自己資金は住宅建設だけで済んだ。

搾乳専門で、今年は300トンの牛乳を出荷するのが目標で、将来的には常時60頭、年間400トンを生産するのが夢。これは北海道の中規模牧場に当たる。それ以上は人手の問題もあり、家族でやれる範囲でと思っている。

宮原牧場の全景。

夫婦で牧場で働いて子育て

宮原さんは熊本県出身。地元の高校を卒業後名古屋でサラリーマン生活を3年間続けたが、たまたま姉の嫁ぎ先の親戚が北見市にあり、出かけてきて北海道が気に入った。

職業安定所で住み込みで働ける牧場の牧夫の仕事を紹介された。昭和52年のこと。

リスクモアで作業中の宮原さん。

翌年、愛知県でOLをしている喜代さんに「いま北海道の牧場で働いている。いずれ自分の牧場を持って酪農をやるつもりだから、こっちへ来いよ」とプロポーズした。

「普通の会社員と結婚するより面白そう」と喜代さんは決意してやってきた。

以来、夫婦で牧場に住み込み、二人の子供を育てた。長女由佳ちゃん（小6）、長男武史君（小4）は牧場生活は当

柳田さん夫妻と4人の子供たち。

マイペース、55歳以降は趣味の農業を

●柳田友之さん 北海道丸瀬布町

柳田さんもリースで酪農をはじめた一人だが、5年間のリース期間を終えて、昨年12月から自営へ踏み切っている。

「借金だらけで正直いって苦しいけれど、やっとマイペースで酪農できます」と表情は明るい。

柳田友之さん(45歳)は東京出身。日大獣医学部を中退、友人と二人で大学の教授の紹介で網走の牧場に入った。200頭ほどの大規模牧場で一年間実習。その後恵庭の牧場へ移り、ここで実習にきていたとみ夫人(39歳)と知り合い結婚した。

続いて友人と富良野市に土地を購入して少しづつ規模を拡大、最終的には畑作と乳牛の二本立てで30町歩までにしたが、それ以上の規模拡大は無理なことと、今後友人は畑作、柳田さんは牛飼いに固執したこともあり、新天地を求めることになった。

柳田さんが北海道農業開発公社の紹介で入植した牧場は、二年前まで酪農をしていたが後継者の息子さんが事故死したため離農した農家。昭和62年にその牧場12町歩と他に10町歩の飛び地をリース、機械なども施設に付帯したものを使用して、できるだけ資金をかけないようにしてスタートした。6年を経て、現在、親牛40頭、育成牛35頭を飼育している。

せかせかせずのんびりと

「よく酪農は朝が早いとか、仕事がきついというが、僕はそうは思わない。生き物が相手だからそれなりの苦労はあるけれど、起きたい時に起きるという生活を続けていますよ。せかせかせずのんびりやっています」と柳田さん。

子供は長男公平君(高3)、次男友太り前という環境で育ったせいか、親たちの手伝いもできる。

しかし奥さんの父親が倒れたのを区切りに一度は愛知県に引きあげた。そのとき相談に行った北海道農業開発公社から、白滝村へ入植しないかという話が舞い込んできたのである。

「何か偶然が重った。これは、どうしても北海道で農業をやれという天の声だと思った」

自分たちの牧場が持てる、と宮原さん一家は再び北海道の人となった。

二人の子供が通う支湧別小学校は全児童9名という小さな小学校で、都会にはないアットホームな環境が気に入っている。冬はスクールバス、それ以外の時は自転車通学。子供の生まれ故郷の北見市にも近く(車で約1時間)、日常の買物も車を利用すれば10分ほどで村の中心街へ出られるので、まったく不便を感じない。

長女は夕食の手伝いをし、長男も搾乳の手伝いを毎日の日課としている。

「ここに来て、やっと自分の仕事を見つけたという喜びと充実感があります。いまの仕事は投資もかかりますが、やればやるだけのものが得られるし、生き物が相手なのでやりがいがあります」と宮原さんは語っていた。

ビニールに包まれた牧草ロール。

牧草を集める柳田さん。

柳田さんの家。

君(中3)、三男拓馬君(中2)、長女あかねちゃん(小6)の4人。子供たちは親の働く姿を見、一緒に手伝いながら大きくなった。しかし、息子たちが父親の築いた牧場と農業への夢を後継していくかは本人次第、気にしないという。

「僕は酪農は55歳で定年と考えています。あと10年頑張り、55になったら趣味の農業をしてみたいと思っています」

今年はその年始めに敷地内に30坪ほどのログハウスを建設する計画。奥さんは草木染めが趣味で、羊の原毛種を2頭飼育し、羊糸をつむぎ、染めて、セーター、敷物などを手作りしている。

「農業情勢は依然として厳しく、乳牛にしても生産枠が毎年流動的で、目標を立てて計画的な経営ができないことが悩みです。肉牛の生産調整の影響も受けます。一年が終わって経営がうまくいった時はほっとします。

新規で入植する人は、一つの経営形態だけでなく、いろいろな事例を参考にして、その中から地域にあった形態を見つければいいと思います」と語っていた。

●リースシステムの概要

〔事業主体〕財団法人北海道農業開発公社

〔条件〕意欲があり、2年以上の経験があること。ある程度の営農資金があること。

〔助成内容〕事業費の1／2を国が助成する。なお、乳牛については公社が農協を通じて貸しつける。リース期間中、経営維持に必要な資金を借りた場合、支払利息に対して助成する。限度額は原則として200万円。

〔事業のメリット〕

・離農者と就農者との経営委譲がスムーズに行える

・意欲的な就農希望者により活力ある自治体づくりの刺激になる

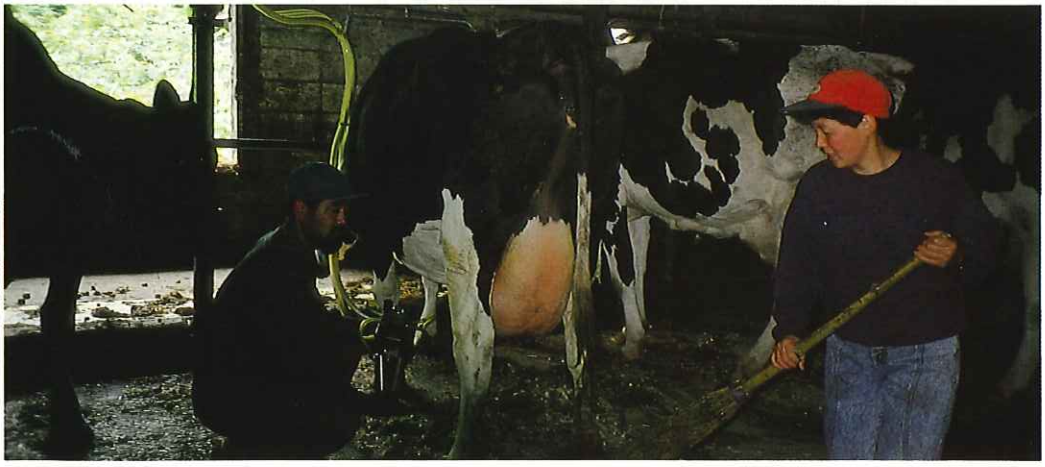
・農地の分散化が防止できる

・就農者は中古施設を利用できるため投資が最小限でよい

・段階的な整備により資力・信用力・経験不足などが補え、新規就農が容易になる

・地域の温かい支援体制により営農指導、財政援助が受けられる

⬅家族の一員である羊と。⬇牛の世話をする夫妻。



取材・撮影／ベイシックワン

カラー紀行

高原の山里に魅せられて

長野県北安曇郡 小谷村（おたり）［土魂塾］

小谷村は長野県の北端にあり、姫川をはさんで西側は3000mの白馬連峰、東側は1800m級の山々に囲まれた峡谷の里。

この村の東側、河岸段丘の上にある黒川という地区に山岸豊吉・昭枝夫妻が居を構えて15年。「やま」又は「土魂塾」と呼ばれるカラマツ造りの家は、映画関係者や田舎志向派・地元の人たちの拠点となり、いまではこの村に約10軒の〝よそもん〟が移住してきている。

早朝から鶏が鳴き、子供たちの笑い声が駆けていく。味噌、豆腐、野沢菜づくり、炭焼き、養蜂など、忘れかけていた山里の暮らしが戻ってきた。

永岡さんと子供たちが保育園から帰ってきた。

土・日曜は早朝から畑仕事に精を出す山岸さん夫妻

自然へ帰る、ムラを再生することが願い

「土魂塾」の主山岸豊吉さんは映画製作者。「荷車の歌」「あ、野麦峠」などを製作していた時小谷村を知った。

「土に根ざした暮らしが夢でした。家のすぐそばに畑があり、一日誰にも会わず畑仕事に熱中できること、四季折々の自然を味わうためには、雪や寒さなど厳しい冬があること、そして家から雄大なアルプスの山々が一望できる場所、ということでここを選びました」

空家になった家を購入して、当初は東京からご主人一人がやってきていた。その農家が失火したのを機に地元のカラマツを使って三階建ての本格的な家を作り、今度は奥さんの昭枝さんが移り住んできた。二階は家を建てる時、経済的に援助してくれた人（会員）や知人たちの宿泊施設になっている。

庭先で50羽の鶏を放し飼いし、二匹の愛犬

食卓には、裏の畑から穫ってきたばかりの野菜、山菜がならぶ。
➡愛犬チコは50羽の鶏たちの見張り番、家族の大切な一員である。

が見張り役。遊休地になっていた畑や山麓をかりて50種の野菜をつくる。味噌も漬物も全部手づくり。家の軒下には冬に備えての保存食がいろいろ貯えられている。

ご主人は映画製作中のため東京住いだが、金曜日には必ず最終電車に乗って小谷に帰り、土・日曜日は夜明けを待って野良仕事に精を出す。昭枝さんは普段は一人で「やま」を守っているが「淋しいことも辛いことも何もありません。もうここから一歩も出たくない」と小谷の生活に満足しきっている。ここでの生活を綴った『ちゃんめろの山里で』が昨年読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞を受賞、最近は原稿用紙に向かう日も多くなった。

「ちゃんめろ」とは、春一番に雪の下から若草色の顔を出すフキノトウのこと。小谷は冬2mの雪が積もる豪雪地帯だが、最近は除雪されるので生活の不便はない。

土曜日の夜は、帰宅したご主人と近所の亭主たちが集って酒もりがはじまる。料理名人の奥さんは自家製の野菜や玉子をメインに、見事なフランス・イタリア料理に変身させてしまう。デザートは採れたての青ものなど。

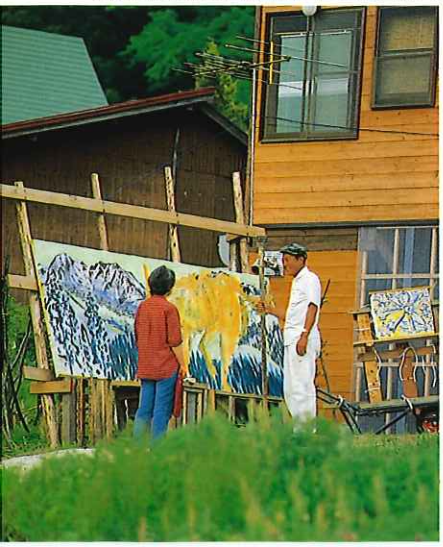
食事の後の風呂がまたいい。庭に浸み出ていた水はまぎれもない温泉水（小谷は温泉郷でもある）。これをタンクに貯めて湧かした木の風呂は、温泉旅館並みの気分が味わえる。もちろん、どの窓からも白馬連峰の雄姿……。

都会人からみると贅沢でうらやましい生活だが、そのためには惜しみなくよく働き、車は持たず、買物には片道30分かけて歩く。そんな山岸夫妻をみると、田舎のどの人達よりもシンプルに自然に生きているような気がする。

＊

「土魂塾」から徒歩六、五分のところに住む

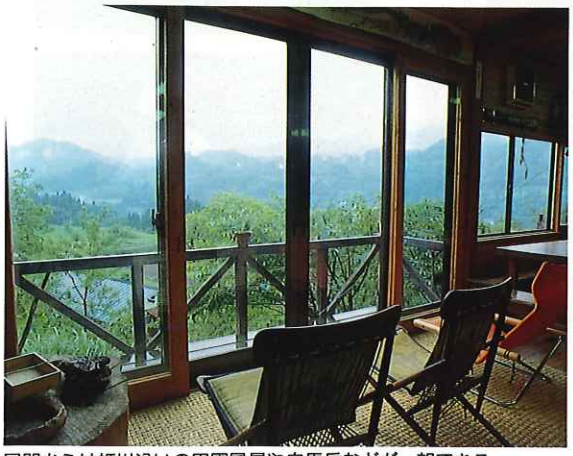
近所に住む能勢画伯の新アトリエ。山や動物をテーマに描いている。



2階は宿泊客用の豪華な和室、ベッドルーム。

温泉水を引き込んだひのきの風呂で温泉気分。

地中から滲み出してくる温泉水を貯水する。


居間からは姫川沿いの田園風景や白馬岳などが一望できる。

雪国の春はまばゆいばかりに美しく、人の情も濃いと山岸さん。

能勢敬蔵さん（61歳）は何度か来村するうちに昨年ついにアトリエを建て住みついてしまった。絵に打ち込むため役所勤めを定年より早く切り上げ、妻子を東京に残しての独り暮らし。目下制作中の絵は、五月頃白馬岳に現われる「代かき馬」という雪渓のイメージ。村民はその馬の姿をみて田植の準備をする。

ひまな時は農家へ手伝いに行き、野菜や米をわけてもらう。今年は裏の畑に大豆をまいたが、翌朝カラスが全部食べ尽していた。「私よりカラスの方がよっぽど利口なんだよ」と能勢さんは悔しくてたまらない。

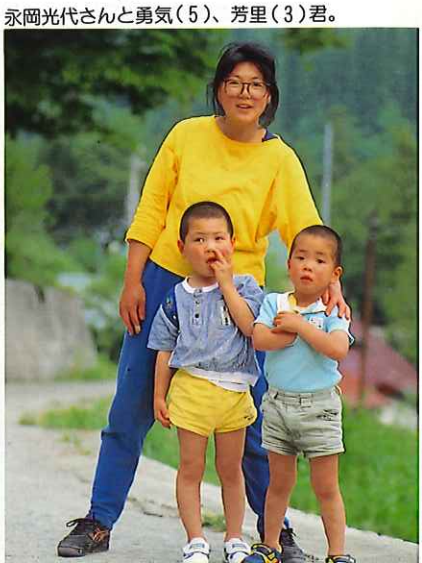
小谷へきてはじめてご飯を炊き料理をすることを身につけた。訪ねた日は、近所から大根をいっぱいもらったので、数日間大根ばかり食べているといい、「味噌汁、漬物、煮物、おろし、それでも余ったからサラダにしている」と笑っていた。

何事も長続きするように、つき合いも酒も腹八分目と心がけているという画伯だ。

「わしらよりも農業のプロだ」

時々「土魂塾」へ立ち寄り、自家製の蜂蜜や、カーンと金属音のする山炭を置いていってくれる永岡誠次さん（35歳）一家は、村の北部地区の空農家に住む。世界中を旅してきた彼は風や雪の音がする小谷を気に入り光代さん（東京出身）と結婚した。

休耕田を借りて一反歩の水田と野菜を作り、山仕事に出て炭を焼き、味噌を作り、横の河原で蜂を飼う。


永岡光代さんと勇気（5）、芳里（3）君。

「わしらよりよっぽど農業のプロですわ。農家がずく（根気）がなくなってやらなくなったことを何でもやって成功させちゃう人だよ」と近所のお年寄りは語る。

一番嬉しいのは、元気な男の子が二人いるのでチビっ子たちの仲間ができたこと。この日は永岡さんの通う保育園仲間のお母さんが遊びにやってきたので、子供たちは大はしゃぎ。彼女の一家も数年前に東京から移住し、スポーツやレクリエーション活動等の指導員をしているという。

「土魂塾」山岸さん夫妻を中心に広がってきた都市からの移住者。この中から次の時代を担う子供たちが育っていくような気がする。

（カメラ／小林恵　文／浅井登美子）

玄関先の手作り看板。

いま、リゾートオフィスが新しい

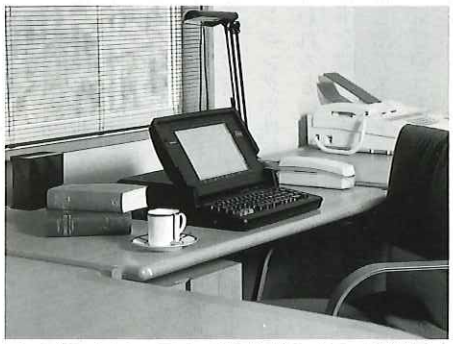
オフィス分散化への第一歩——㈱泉郷・八ヶ岳リゾートオフィス

緑に囲まれたオフィスコテージの外観

最新のインテリジェント機能と、先端のOA機器に囲まれたハイテクオフィス。そんなオフィスが、野鳥のさえずる広大な森の中に点在する。

㈱泉郷の「八ヶ岳リゾートオフィス」は、先端のオフィス機能とリゾートライフ機能が一体となった、話題の新スポットだ。

東京への一極集中是正という、時代の一翼を担ったこの新事業は、都会と地方の新しいあり方を模索する多くの関係者から、いま熱い注目を浴びている。



ワープロ、ファックス、電話などのオフィス機能も完備。
ゆったりとした雰囲気で、ミーティングや研修会にぴったり。

ゆったりくつろげるリビングスペース。
冬の暖房にも一段と気を使っている。

オフィス機能をすべて揃えて

通産省委託研究参加認定第一号という栄誉ある認定を受けたこの「八ヶ岳リゾートオフィス」は、八ヶ岳高原南麓に広がる泉郷の別荘リゾート地の中にある。

その広大な敷地の中には㈱泉郷の700棟にも及ぶ貸別荘が点在し、木立ちの中にレストランや、プチホテル、アスレティック施設などの付帯施設がすべて整っていて快適だ。

リゾートオフィスは、センター機能をもたせたコア施設と、4タイプ5棟からなるオフィスコテージを、仕事の内容や人数によって自在に組合せることができるため、利用の仕方も幅広い。コア施設にはフロントが設けられ、カラーコピーや宇宙経済受信用FAX、70型ビデオプロジェクター、簡易製本機、VTR、LD、カセットテープデッキ、電子黒板、書画カメラ装置、コピー、FAXなどの機器の揃ったビジュアルコミュニケーションルームの他、各種専門誌や辞典の揃ったライブラリースペースなどが設けられている。

ここでは本社との打ち合わせや、会議、プレゼンテーションなどが行われ、ワープロやFAX、電話等の揃った各オフィスコテージでは、プランニングや執筆など、集中した知的作業が行われるという。

また、仕事を離れたオフタイムには、コア施設に付帯したアスレティックジムで汗を流し、ラウンジでのコーヒーブレイクを楽しむこともできる。

コテージは木の香りのするゆったりとしたリビングスペースや、畳の和室も設けられ、ここへ来ればオン・オフともに心から満喫することのできる時間を持てるというわけだ。

現在では清水建設や内田洋行、日立などが主な利用企業だが、企業に限らず新聞記者やファッションデザイナーなどの個人利用も増えてきているという。

㈱泉郷業務部経営企画課の山崎課長代理はいう。

「窓の外には野鳥やリスもやってきますし、自然の景観をそのまま生かした素晴しい環境です。そんな景色を眺めながらデスクに向かっていただけるわけですから、もっともっと幅広い分野の方々にご利用していただけるものと考えています。コンピュータのプログラマーの方、作家、作詞、作曲の分野の方などにも、ぜひお勧めしたいですね」

地域との共存を重視して

八ヶ岳地域では23年の実績をもつ㈱泉郷だが、この他にも蓼科高原、伊豆高原、安曇野、苗場、鳥羽と、各地に幅広いリゾート事業を展開している。

リゾート開発というと、とかく自然破壊の先兵のようにいわれる昨今だが、㈱泉郷の理念は一貫して自然を壊さず地域との共存をめざすことにあるという。

泉郷グループ、ワイシーケー企画㈱の藤岡係長にその辺りを具体的に訊いてみた。

「ここ数年、リゾート法などへの反発もあり特に無謀なゴルフ場開発などがやり玉にあげられました。これに対し、多くのリゾート開発業者は、〝自然にやさしい〟などという言葉を表向き、しきりと使いはじめましたが、実態がともなっていないというのが、現状です。私どもは、昔から一貫して、なるべく木を切らず、自然の景観をありのままに生かそうという姿勢で取り組んでまいりました」

そうした㈱泉郷の考え方が如実に反映されているのが、昨年オープンした「泉郷プラザホテル　安曇野」だ。

北アルプス常念岳を背にした南東斜面60万㎡の規模の安曇野泉郷。一区画1,000㎡以上の広さで別荘が点在する中に、自然との調和をコンセプトに生まれたリゾートホテルだ。

針葉樹の林の中に建つ美しい曲線のその建物は、等高線に沿って建てられているという。電線は地中埋設され、電柱は最小限にとどめ、

コテージ内のリビングスペース。畳の和室が気分をくつろがせてくれる。

ほとんど無いといっていい位、目につかない。

ホテル建設のための森林伐採も最小限にとどめた。ホテルや別荘で消費する食糧は、極力地元の生産者から仕入れ、雇用面でも地元の人材をフルに活かすことに努めているという。

地域との共存を重視した㈱泉郷のこうした姿勢は、都市への一極集中化を緩和しようというさまざまな動きの中で、地方からも都市の企業からも、大きな関心をもって注目されているようだ。

八ヶ岳泉郷では、別荘オーナーたちを中心に数々のイベントを催しているが、地元の小学生たちもこぞって参加する児童書道展や、テニスのジュニアチーム対抗戦なども、年をおって定着してきている。

また、野鳥やタヌキ、キツネ、リスなどが見られる泉郷の自然観察舎は、二年前から手話を通じての説明も行っており、こうしたことが、地元の山梨日日新聞で紹介されるなど、地域との結びつきも深い。

リゾートオフィスとしての利用は、むしろこれから本格的に軌道にのせたいという考えだが、その場合、問題となる点は、

「理想としては最低一週間位は滞在して、心身ともにリフレッシュしていただきたい、というのがウチの考えなのですが、実際には会社から出張経費でこられる場合が圧倒的に多く、一泊二日程度の滞在がほとんどです。リゾートで仕事をするという観念が、どこかで後めたさに通じてしまうような、働きバチ日本人の悲しさが、リゾートオフィスという新しいライフスタイルの妨げになっているように思います。企業そのものが、もっと頭を切り換えないといけませんね」

と、㈱泉郷商品部の田名網部長はいう。

実際に利用者の感想は、「もっとゆっくり、せめて5日か1週間位は滞在したいと思う」という声が圧倒的に多いということだった。

●問い合わせ・㈱泉郷／東京都杉並区上高井戸2-1-1 ☎03(3329)3311㈹

オフィス分散化をめざして

「日本サテライトオフィス協会」発足

社団法人「日本サテライトオフィス協会」は、今年6月、通産省、郵政省、国土庁、建設省の四省庁共管の法人として発足した。

サテライトオフィスとは、職住接近を目的に、都市周辺部に置く〝衛星的〟なオフィスのことで、OA機器などを使って本社と通信ができるなどの機能をもったものをいう。

「日本サテライトオフィス協会」では、首都圏への企業の集中による地価高騰や、オフィスコスト高、住宅難、交通難などの解消のため、また地方における大都市への人口流出による、活力の低下などの解消のためにも、サテライトオフィス、ホームオフィス、リゾートオフィスの推進を積極的に進めていこうと考えている。

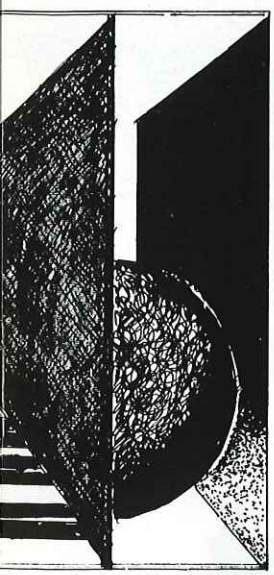
同協会としては、これによりオフィスの地方分散化、特色ある生活圏づくりと地方の活性化、女性、高齢者、障害者などの雇用機会の拡大などをめざし、企業側に対しては、トータルオフィスコストの低減やオフィス環境の改善、労働力不足への対処、通勤負担や住宅難などからの従業員の自由時間の創出などを要請している。

現在、この協会には㈱内田洋行、NTTデータ通信㈱、㈱大林組、鹿島建設㈱、コクヨ㈱、㈱さくら銀行、清水建設㈱、住友信託銀行㈱、㈱第一勧業銀行、㈱竹中工務店、日本開発銀行、富士ゼロックス㈱、㈱リクルートなど75社と48の自治体が、会員となって参加しているという。

まだまだ一般には普及していないサテライトオフィスやリゾートオフィスだが、今後は推進のための調査、研究や、セミナーの開催、人材育成、関連団体との交流を通じて、広く啓発、普及を行っていきたいと考えている。

町づくり村おこしの差別化を

俳優・エッセイスト　渡辺文雄



●どこの観光地も似ている

旅が同じようになってきてしまった、と感じられてならない。TV番組の取材という便乗旅行をもう20年以上、月1回以上というペースで続けてきたが、最近どの旅の印象も非常に似たものになってきてしまったという感じが強くなった。このことの原因は二つあると思う。

先ずは旅する側のこちらの感度が鈍くなってきているということ。旅もしすぎたし、年も年だし、まぁこのことは間違いはあるまい。しかし、原因は旅される側にもあるということも、かなり確信をもって言える。

似ているのである。旅した先のいろいろが実に良く似ているのである。もちろん何から何までが画一的であるというのではないが、特に旅する側に接するものが実によく似ている。

例えば見てすぐに分るもので言えば、駅前の風景がどの町もよく似ている。よし、観光地として頑張るぞと、その町が張切れば張切る程、その佇まいと空気はそっくりになってくる。さらに、観光ポイントも似ている。見た目の様子はそれぞれ違っているのは当然だが、そこに漂う空気がどこもそっくりである。

何故似るのか。すぐに思いつくことがある。

「さて我が里の町づくり村おこしを」と思った時に、最初の起動力となるのは、「ああこういう風にしたいな」と思い画くイメージである。

これが似ている。そっくりである。ついでに言えばそこに至る方法、方程式、マニュアルがそっくりである、というよりほぼ同じである。

一時日本全国でほとんど一斉に開催された地方博というのを見た時にしみじみと思った。今あの時のことを思いかえしてみても、一、二を除いて、どこでどういうことをやっていたかは、とても明確には思い出せない。ほとんどが全く同じ印象である。それぞれに趣向はこらしていたが、最後はナントカタワーとか、観覧車に乗って上の方から会場全体を眺めて「へぇー」なんて言ってたことしか思い出せない。

「それはそうさ。どこもその立案設計運営は、二、三の大手の企画会社、代理店だったからね。」後から聞いた裏話しである。

「しかも、その会社同士だって、皆先行してる会社のやったことを、参考と称してほとんど真似してるんだから、似たってしようがないというもんさ。ま、今日本中でやってる町づくり村おこしだって、似たような状況を抜け出せないんじゃないかな」

まことに念のいった話しである。

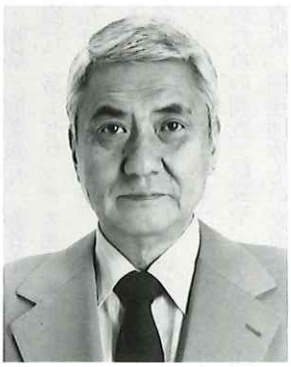
真似をする、したいという心の中にひそむものは何か。失敗をしたくない。この一事である。

この性向の基は我が民族の血である、という話を昔ある先生に聞いたことがある。

今でこそ先進工業国などと言っているが、つい数十年前迄はこの国の人間のほとんどは農民であった。つまり、日本民族の体の中を流れている血は農耕民族の血なのだ、というのである。

農業というのは見た目が地味だから、ついそうは思えないが、その実体は大そう大がかりな博奕である。つまり我が地面に何を播くかということを決める時、半年後なり一年後（場合によっては二年三年後ということもある）の結果を考えれば、そう簡単に決める訳にはいかない。不作であれば当然、全国的に豊作で出来過ぎということになっても失敗。ましてや新しい作物に挑むなどということになれば、生半かな決心で始めることは出来ない。出来ればあたりを見廻し、成功例の一つを見つけ出し、その後を追うというのが、最も望ましく安全なことである。

失敗すればそのすぐ背後に待ちかまえているのは、牙をむいた飢餓。そんな日々を千年以上も続けてきたのだから、ここ30年や40年の間にその血が変わるなどということはありえないと言われてみれば、それはそうだと肯じざるを得ない。



●同質化しやすい原因は――

今、世の中の企業間でやかましく言われているのは、差別化である。いかに他社と競合せずに独自の生産世界を創り上げるかということであろう。

これは苦手だ、これは出来ない。町づくりだ、村おこしだと声高に叫んでみたものの、さてどこからどうしたらよいものか。はてなはてなと首をひねってみるものの、気がつくとあたりの様子、具合を覗っている。

当事者達がどうしていいか分からないだけではなく、その周辺の関係者達もまた気づかぬうちにいつの間にか我が民族伝来の血に支配されてはいないだろうか。

今、町づくり村おこしの具体的な経済的基盤となっているのは、中央からの交付税や各種補助金であると思う。この地方格差を少しでも無くそうという配慮に文句はない。しかしこの格差を無くすという思いの中に、同質化という概念がまぎれこんではいないだろうか。

同質化を強力におし進める力の一つに、隣との競争というのがある。単純に隣にだけは負けられないという強い思いである。隣町であんな立派な文化センターを作ったのだから、うちだって負けずに文化センターを。この気持ち、分からなくはないが、しかしこの競争、言ってしまえば同じようなトラック上の争いでしかない。

そのトラックのゴールの先に薄ぼんやりと見えるのは、東京、大阪などの大都会の蜃気楼のような影なのではないか。同じトラックで同じ方向へむいての競争、これでは差別化等出来る筈もない。

私は東京在住者で、町づくり村おこしの専門家ではない。つまり全くのど素人である。このど素人の無智無責任のあつかましさでこの際言ってしまおう。盲蛇に恐じずである。

●どうしたら東京を離れられるか

方向を変えたらどうだろう。つまり町づくり村おこしの方向は、どうしたら東京に近づけるかではなく、どうしたら東京から離れられるかという方向へである。

確かに今の東京にはいろいろのものがあり、便利で筋力もあまり使わなくていいような仕組みが出来上っている。ただ、ものには限度というものがある、ということも皆んながうっすらと感じ始めてもいると思う。

新しい高層ビルが出来れば、話しの種にと最上階まで行ってみるものの、このまま行けばどうなるのだろうという思いも、ちらっと頭を横切り一瞬不安な気持になる。アスファルトの道の照り返しに汗をふきながら、この東京という街の地面は、どこで息をしているのだろうかという思いにとらわれることもある。

ある村のある青年からすばらしい道のアイディアを聞いたことがある。勿論素人が素人にした話しだから実際に作れるかどうかはわからない。ただ、その時は今まで思いもしなかったすばらしい話しだと思った。

つまり、もっとお金をかけてすばらしい土の道を作ることは出来ないだろうかというのである。道といえばアスファルトと思いこんでいたが、金をもっとかければ夏に埃の立たない、雨にぬかるまない道が出来るのではないか、というのである。

「そうすればこの村の風は、もっともっと爽やかになると思うんだけどなぁ」

差別化はもっともっと評価されるべきだと思う。具体的で、思いもかけないアイディア。そうだ、この町はこうあるべきだったんだと、思わず膝を叩くような発見。そういうものには経済的にもより多くの応援を送るべきではないかと思う。

それともう一つ。失敗を非難しすぎるべきではないと思う。ちっぽけな成功からはほとんど情報は得られないが、失敗というものは、それを勇気をもって直視すれば、思いもかけない情報を発見することが往々にしてあるものなのである。失敗は成功のもと、この諺は間違いない。

●わたなべ・ふみお氏／1928年10月31日東京神田生まれ。昭和29年東京大学経済学部卒業、電通調査局入社。31年松竹「泉」で映画でデビュー、36年大島渚らと創造社を設立、「日本の夜と霧」「少年」「儀式」など数多く出演。創造社解散後は俳優業のかたわらTVレポーター、司会、講演、執筆など多方面で活躍。著書「毛づつみ各駅停車」「味な旅があるものだ（主婦と生活社）他多数。日本エッセイストクラブ会員、運輸省観光交流拡大推進会議委員。

農業をはじめませんか
新規就農者のための窓口・各種制度

「農業をはじめてみませんか」キャンペーン実施中
全国農業会議所「新規就農ガイドセンター」

全国農業会議所(農水省認可法人)では昭和62年度から「新規就労ガイドセンター」を開設、就農希望者の相談と全国各市町村への紹介を行ってきた。

平成3年度までの5年間に寄せられた相談件数は1200件、相談者は4400人ということだが、実際に就農した人は全国で140人弱。

「8割から9割が単に農業に憧れている人で、具体的に計画を持っている人は2割程度です。さらに受入れ町村の農地の状況、助成金、自己資金、住居の問題等をクリアして入村・就農へゴールする人は相談者の3%弱です」と五位渕相談主幹は語っている。

一方、今まではせっかくのガイドセンターも一部の人にしか知られておらず、また受入れ側の県や市町村、農協等の窓口がないところもあり、必ずしも就農希望者を満足させる対応ができなかった。そのため、平成4年度より、新たな相談活動として「農業をはじめてみませんかキャンペーン」を実施、昨年から広島・東京・晴海、京都の農林水産フェスティバル等の会場で移動相談会を実施。

相談会場では①個別相談コーナーの開設、②コンピュータを利用して農地などの情報を提供、③農業や農村の役割や助成金等の金融関係をパネルで展示する④ビデオの上映⑤募集している町村のパンフレット配布等、従来より具体的かつ積極的な対応をしている。

この背景には、平成4年6月に農林水産省が発表した「新しい食料・農業・農村政策の方向」で次のように述べていることにある。

「意欲と能力のある者が農家子弟以外の者を含め、幅広くかつ円滑に農業に参入できるように、広域的な募集、技術経営研修・給与の支給、農地の提供などを一体となっておこなう地域の取り組みを支援する」

つまり、新規就農者を受入れる市町村には国も何らかの支援をしていこうというもの。

今まで後継者対策には熱心に取り組んできたが、後継者不足や農業従事者の高齢化は深刻で、休耕田、遊休地は増え続けている。そのため田舎志向派が増えている昨今の状況を考慮し、新規参入者の受入れやすい環境をつくろうという方針である。

利用者から「古い」「具体性がない」といわれた農用地の物件情報だが、情報のデータベース化でスピーディに対応できそうだ。

一方「農業に従事したい」という人をみると、①農業自体に関心が高く農業収入で食べていきたい派、②自然志向派、③定年後のセカンドライフ派、の三種のパターンがあり、一般には「ニワトリや牛をちょっと飼えば農業で食べていける」と思っている人も少なくないようだ。

農地を借り、空家を利用する場合でも、農業で自立していくためには何年間かの投資期間が必要で、自己資金としては最低500万円から1000万円は必要だと関係者はいう。

新規就職希望者は、まず研修会等に参加し、できれば半年から一、二年間農家に入り実習することを勧めている。

●問い合わせ／全国農業会議所・全国新規就農ガイドセンター　東京都千代田区有楽町1-9-4 蚕糸会館内☎03(3214)6626

就農相談のマニュアル作成
岩手県農政部／いわて・むらづくり塾（岩手県農業会議）

岩手県農政部では、やる気のある優れた農業者や若い農業者を育成確保していくことが農業の振興に重要課題だとして、平成5年2月「就農相談マニュアル」を作成、県内の市町村や関係団体に配布した。

同書は、①若い農業者育成・確保の現状、②育成・確保の目的と基本方向、③具体的推進方策で構成され、①では農業者の動向がグラフ等で示されている。

それによる農業王国である岩手県でも、農家数、農業従事者は急テンポで減少(15年間で15%減)、しかも労働力としては20代までが9・7%、60歳以上が最も多く32%になっている。

非農家出身の新規参入者はまだ少ないが、平成2年までに10人(農業改善並貢及所調べ)入植している。このままいくと農業、農村の活力が失われる危機にあり、今後はあらゆる組織を連動して若い農業者を確保・育成していく必要があると述べている。

具体的にどのように進めていったらいいか、相談窓口、研修機関、助成金、農用地活用の法律的問題等を一覧したのが③章。

そこで本誌の特集と関連ある「ゼロから農業を始めたい」という人のために、一部を要約すると、

・就農希望者は――何を作るか(どんな家畜を飼うか)、どこでやりたいか、資金はあるか。

・就農までの手順、ポイントは――①現地見学②一般的農業体験(農家で)③農家研修(専門的な技術を学ぶ)④経営・技術習得(県立農業大学校他で)⑤農地等取得(住宅、施設、機械等)の手続き。

・新規就農者には、若い農業者入植促進事業、農業改良資金、その他の各種制度がある。

●問い合わせ／岩手県農政部☎0196(61)3111

都道府県で実施している新規就農の支援活動

①名称、所在地、電話番号　②就農希望者へのメッセージ　③受入れ可能な農業部門など　④主な支援活動

■北海道

①北海道農業青年人材銀行（グリーンバンク）
札幌市中央区北３条西７丁目　北海道庁別館
北海道農業会議内　☎011-281-6761～6763

②豊かな自然の中で生きる喜び「北海道農業へ」
ロマンと可能性に満ちた北海道は、新しいフロンティア・スピリットを求めています。大規模で効率のよい北海道農業。冷涼な気候のもとで生産された農産物はクリーンなイメージと新鮮さや味のよさで高い評価を受けています。

③特に限定なし。

④・専任の相談員による就農相談、農地や農業体験実習受入れ農家等の情報の提供
・道立農業大学校での研修（１年間）、優良農家での実習
・農場リース：酪農や肉用牛経営を希望する方に、公社が準備した農場を一時貸付け（原則５年）した後に売渡。

■青森県

①いきいき青森・就農センター
青森市長島１丁目１－１　青森県農業指導課（担い手育成班）☎0177-22-1111 ㊥3224
東京相談所：都道府県会館別館４階　青森県東京事務所内
☎03-3261-0100～0103
大阪相談所：大阪駅前第１ビル９階　☎06-341-2184
名古屋相談所：中部日本ビルディング４階 ☎052-251-2801

②「はつらつとして、うるおいのある青森県」で、新しい農業にチャレンジしてみませんか!!
広い農地や涼しい気象を生かして、野菜、花、畜産等を中心に特色ある農業を展開してます。

③おおむね40歳以下の方

④・青森県農業に関する情報提供、就農相談
・青森県農業の現地見学、農業体験のあっせん
（就農が具体化した時点で受入れ市町村が就農支援を実施）

■秋田県

①秋田県農業技術開発課（青少年育成担当）
秋田市山王４丁目１－１　☎0188-60-1746
窓口　東京：東京交通会館11階　☎03-3213-7788
大阪：大阪駅前第１ビル９階　☎06-341-7897
札幌：北海道経済センター内　☎011-231-3177

②「集まれ！アグリアドベンチャー」── 新たに農業を始める方を応援します ──

③花、野菜、果樹、畜産、きのこ等水稲以外の部門でおおむね１ヘクタールを基準。原則としておおむね40歳未満の夫婦。

④・受入れ市町村情報の提供、就農相談、技術指導
・研修先のあっせん、研修費の助成
・農地のあっせん、施設機械のリースや資金融資
・住宅のあっせん

■富山県

①富山県農業担い手育成センター
富山市新桜町６－15　富山県農業会議内　☎0764-41-8961

②あなたの「とやま」夢を育てませんか！
応援します、農業への想い。お待ちしています、新しい担い手。

③稲作、園芸（野菜、果樹、花き）、畜産のいずれも可。
おおむね40歳以下の方。県内外、農業経験の有無は不問。

④・就農に関する相談や情報の提供
・農業体験研修や技術習得研修の実施
・農地の確保や施設機械の整備に関する事業の実施

■島根県

①島根県農業指導課（普及企画係）
松江市殿町１　☎0852-22-5119

②「夢、応援します！」新たに農業経営にチャレンジしたいという人が、よりスムーズに就農できるよう、技術、資金、土地の問題を総合的に解消します。

③経営部門の限定なし。年間10名以内。
40歳以下の意欲ある人、生産基盤が不十分な人。

④・研修事業：原則２年以内の研修、月額一人10万円の研修費の貸付。（就農５年で返還免除）
・整備事業：1/2補助、残り1/2はリース代として12年間で支払う。

■岡山県

①岡山県新規就農確保対策協議会
岡山市内山下２丁目４－６　岡山県普及園芸課（担い手育成班）☎086-224-2111 ㊥3164
東　京：都道府県会館５階　☎03-3265-5771
大　阪：岡山県産業ビル４階　☎06-261-3206
名古屋：ガーデンビル４階　☎052-581-6018

②「晴れの国 岡山」で農業を！
── 全国で一番雨の降らなかった日が多い岡山県で農業にチャレンジする若い人材を募集します。──

③希望作物により、市町村等に照会する。

④就農希望者に対する情報提供、就農相談、あっせん（研修先、農地、施設機械、住宅）

■山口県

①新規就農支援センター
吉敷郡小郡町大字下郷2139　山口県農業協同組合中央会内
☎08397-3-2224

②ゆめ育てませんか ～応援します農業への想い～ お待ちしています、新しい農業の担い手。

③特に限定なし。

④・新規就農資金：限度額　250万円／年×３年
償還期間　15年以内（うち５年据置）貸付利率　無利子
・新規就農施設等：限度額　1,200万円
整備資金：償還期間　5～10年（うち2～7年据置）
・新規就農者支援農地保有合理化
：５年以内貸付け後売渡し促進特別事業

■大分県

①大分県営農指導課（後継者対策係）
大分市大手町３丁目１－１　☎0975-36-1111 ㊥3585
東　京：大分県東京事務所内　☎03-3501-0261
大　阪：大阪駅前第三ビル21階　大分県大阪事務所内
☎06-345-0071

②「農業するなら大分で」やる気応援！新農業
── 貴方の農業にかける意欲と新しい発想を私たちの大分で広げてみませんか。──

③受入れ市町村の推薦する経営部門を基本とし、農業を本当にやる気のある人。

④・新規就農資金：新規就農年から３年間、毎年、上限200万円を無利子で貸付け。
・農場の貸付け：公社が準備した農場を最長５年間無料で貸付け。
・農地取得資金の利子補給：公社貸付け農場の買取りの際に、農地取得資金の融資を受けた場合は、金利の2.5%相当を５年間助成。

■鹿児島県

①鹿児島県経営技術課（担い手育成係）
鹿児島市山下町14－50　☎0992-23-2470

②WANTED 青年よ大地を抱け
── 退屈はいやだ、エキサイティングな人生を送りたいと考えているあなた、鹿児島の大地に夢を描いてみませんか。──

③受入れ市町村により異なる。
本当に、農業で「めし」を食う覚悟のある人。

④・鹿児島県農業、農村のPR
・就農希望者に対する就農相談、各種情報の提供・紹介
・就農後の技術、営農指導など

県	市町村名	就農希望者へのメッセージ	受入れ可能な農業部門	役場電話番号
石川	珠洲市	花の里 やすらぎのむらづくり	水稲、野菜、果樹(りんご)、葉たばこ、畜産、養蚕	0768-82-2222
福井	池田町	ふるさと十字軍の館～星とホタルとせせらぎ	水稲、野菜(トマト)、肉用牛肥育、ナメコ他	0778-44-6111
岐阜	萩原町	偉大なる田舎づくりを楽しみませんか	トマト、ホウレン草、菊、トルコキキョウ等	05765-2-1181
	小坂町	御嶽の緑と清流を活かした創造的人間を育成	園芸作物(トマト、ホウレン草、夏秋菊)、飛騨牛	057662-3111
	丹生川村	「雪、花、サラダの村」をスローガンに農業と観光産業	高冷地野菜栽培で研修生の受入れ、20歳代の青年	0577-78-1111
	久々野町	ひだ桃源郷、緑豊かな大地で翔く	畑作部門(施設、露地)40歳未満	0577-52-3111
	朝日村	緑とこだまの里　朝日村―来たれ若者よ	畑作経営部門(畑作経営に情熱のある家族)	0577-55-3311
	宮川村	若さが作る深山の農苑 ―― 自然と共にいきいき	高冷地野菜／3～5名、1戸当たり2～4ha	0577-63-2311
三重	御浜町	年中みかんのとれる町―国営農地60haで	みかん栽培(5年で2.7ha程度の経営規模に)	05979-2-1311
京都	丹後町	国営開発農地で、大規模畑作営農を展開	畑作経営(45歳未満で新規入植の方)	0772-75-0260
	弥栄町	農家をやりたい人にその一歩を提供します	一般畑作(労働力1.4人以上、資金：700万円)	0772-65-2111
兵庫	温泉町	豊かな温泉と自然環境を生かした観光のまち	畑地造成における畑作営農(約5ha)	07969-2-1131
和歌山	本宮町	緑豊かな自然、歴史と温泉の町で農業を	稲作、畑作、林業(伐採、植林)、子供のいる家族	07354-2-0070
鳥取	米子市	山陰の中核都市、白ネギの産地で高収益	彦名干拓地での畑作、概ね30km圏内の鳥取県民	0859-22-7111
	国府町	標高1,000mの河合谷高原に造成された畑地25ha	夏大根など高冷地野菜の栽培	0857-22-0111
	東伯町	大山、日本海を臨み、梨園、水田、芝畑の大地	果樹、畜産等が可能	0858-52-2111
	日南町	大地の恵みと豊かな心の共生する町	県立日南試験地で研修生受入れ(年齢35歳未満)	0859-82-1111
岡山	川上村	三白農業の村（米、大根、牛乳）へどうぞ	酪農(後継者グループ)、山ブドウ生産、ワイン	0867-66-3611
	勝央町	くだものと緑の町勝央でもうかる農業を	果樹部門、野菜部門、その他(若干名、概ね40歳以下)	0868-38-3111
広島	口和町	地域特産物の振興と農用地等の有効利用を促進	農林業(町に定住して農林業を営む方)	08248-7-2111
	大柿町	広島湾能美島の南部に位置する花のまち	カーネーション切り花生産の研修生の受入れ	0823-57-3000
山口	東和町	日本一長寿の町、みかん、人情、美しい海岸線	みかん、施設園芸、観光農園等	08207-8-1110
	山陽町	山あり、海あり、遊びあり＜３Ｙ計画＞	農・工・商業全般、農地は遊休地14ha	0836-72-1111
	豊浦町	都市近郊の町の利を生かした施設野菜を振興	部門の特定はありません(若干名)	0837-72-0611
	豊北町	緑多い田舎で農業を、元気な新規就農者を	水稲、露地野菜、施設園芸、酪農、肉用牛他	0837-82-0061
徳島	山川町	緑広がる自然の中であなたの若さを活かそう	若干経験のある人、40歳前後位まで	0883-42-4399
香川	塩江町	観光と農業との連携により楽しい農業を！	水稲、野菜、しいたけ、茶、花き、果樹	0878-97-0131
愛媛	肱川町	わき上がる風でロマンの町づくり	経営部門は問わず、大規模経営は不可	0893-34-2311
	宇和町	標高200mの高原盆地。自然の美しさと文化財の町	水稲、畜産、ブドウ、茶など	0894-62-1111
高知	土佐昭和農業協同組合	四万十川流域に農業の楽園を築こう“あぐりぴあシマント”	研修生の受入れ、25歳以下の未婚の男女	08802-8-5211
福岡	二丈町	もっと豊かにハッピーに、町の発展に頑張って	熱意があって地域の人と仲良くやっていける方	092-325-1111
	黒木町	若い就農者を歓迎。果樹、花、いちご、茶の里	茶、なす、花、ぶどう(夢と希望をもった方)	0943-42-1111
熊本	菊鹿町	来たれ若い農業者！菊鹿町は君を待っている	花(きく)、施設メロン、すいか、水稲など	0968-48-3111
	阿蘇町	豊かな自然と心ふれあう農村で人生の再出発	施設野菜（トマト、メロン、イチゴ）、水稲	0967-32-1111
	長陽村	来たれ若い農業者！長陽町は君を待っている	施設メロン、イチゴ、トマト、水稲、若い独身者歓迎	09676-7-1111
	清和村	“文楽と食のふるさと”若いあなたを待っている	高冷地の気候風土を生かした湧水米、高原野菜	0967-82-2111
	鏡町	い草、メロン、トマト、海苔など有数な産地	い草、施設メロン、水稲など(40歳未満の方)	0965-52-1111
	湯前町	明日の農業を切り拓く若い農業者を募集	施設メロンなど(年齢45歳以下の既婚者など)	0966-43-4111
大分	竹田市	やる気のある人、荒城の月と緑と花のある町へ	本人が希望し、経営が成り立てば何でもOK。	0974-63-0402
	庄内町	水稲と果樹を中心に企業的経営農家の育成	相談に応じます。	0975-82-1111
	天瀬町	やる気募集、水稲、しいたけ、果樹、花き等	施設園芸(特に花き)、農業公社に勤務	0973-57-3101
	安心院町	“未来予想図夢計画” ―― 自然と史跡と味の里	施設野菜(メロン、イチゴ)、果樹(ブドウ)、畜産	0978-44-1111
宮崎	都城市	平坦な広い耕地、農業には恵まれた自然環境が自慢	施設園芸(野菜、花き)年齢概ね30歳までの大卒者	0986-23-2111
鹿児島	長島町	海に囲まれた農業と漁業の町であなたの力を	バレイショ、カボチャ、レタス他、Ｕターン者	0996-88-5511
	和泊町	南の島で花に囲まれながら農業を体験	花き栽培の研修受入れ	0997-92-1111
沖縄	下地町	沖縄本島から南西に300km、農業と観光の町	農業全般(年齢40歳未満)農家での研修受入れ	09807-6-6137

新規就農者の受入れ体制のある市町村

（平成５年４月現在）全国農業会議所調べ

県	市町村名	就農希望者へのメッセージ	受入れ可能な農業部門	役場電話番号
北海道	黒松内町	あなたの手で新しい農業を。３家族が入植中	酪農・畜産経営（乳牛20頭、農地15ha以上）	01367-2-3311
	北竜町	夢と自然を探しに、ひまわりの里北竜へ	水田５ha、畑作３ha、田畑複合７ha以上	016434-2111
	上川町	北海道の中央部、大雪山国立公園の北方部	酪農、畑作。個人経営45歳未満、共同経営も	01658-2-1211
	美深町	１年間の地元農家での実習後、優良農地取得	酪農、畑作。個人経営40歳未満、共同経営も	01656-2-1611
	中川町	新しい息吹き、熱い希望で新しい農業を創造	酪農／40歳位までの既婚者、畑作／新規学卒他	01656-7-2811
	天塩町	豊かな天北の大地で牧場してみませんか	酪農／農地30ha以上、乳牛30頭以上、家族	01632-2-1001
	中頓別町	最北の鍾乳洞の町、就農に向けて環境整備中	酪農／農地10ha以上、乳牛、肉用牛20頭以上	01634-6-1111
	白滝村	農業を通して自然のすばらしさを体験しよう	酪農／乳牛25頭、農地20ha以上、畑作25ha以上	01584-8-2211
	滝上町	人いきいき、町わくわく、童話村たきのうえ	酪農／農地30ha、乳牛30頭以上、畑作10ha以上	015829-2111
	雄武町	私たちと酪園づくりしませんか。農休日あり	酪農／おおむね40歳未満。酪農ヘルパー巡回	01588-4-2121
	清水町	日本を代表する十勝平野で農業をはじめよう	酪農・畑作を中心に。おおむね40歳未満	01566-2-2111
	中札内村	幸せになる勇気を北の大地が与えてくれる	酪農／おおむね40歳以下の妻帯者か結婚見込者	0155-67-2311
	忠類村	うるおいと安らぎのある個性豊かなふるさと	畑作／15ha以上、酪農・肉牛／乳牛30頭以上	01558-8-2111
	大樹町	日高山脈のすそ野、清流日本一の町	畑作(離農跡地が２口)、酪農(牛舎４棟)、畑作	01558-6-2111
	本別町	共に働こう、この大地	酪農・肉用牛／10ha以上、畑作、園芸施設他	01562-2-2141
	浦幌町	北の大地で悠々マイ・ファーム築きませんか	酪農、肉牛経営、畑作。40歳未満	01557-6-2111
	厚岸町	「あっけし」の人になってください	酪農／30頭以上、40歳未満の配偶者等いる人	0153-52-3131
	浜中町	おいでよ、酪農王国浜中町へ全面的に支援！	酪農／40歳以下で従事する人が２人以上いる	0153-65-2121
青森	蓬田村	まるこまんまの自然「よもぎた」	施設野菜、露地野菜(配偶者のいる方)	0174-27-2111
	稲垣村	大自然の中で、あなたも農業の経営者に	全部門（原則として村内出身者）	0173-46-2111
	藤崎町	日本一のりんご「ふじ」のふるさと	りんご、水稲、ぶどう、野菜各種	0172-75-3111
	尾上町	緑豊かな実りある町、収益性の高い作目	稲作＋野菜（50a以上、２人、40歳以下）	0172-57-3115
	平賀町	主要作物は米とりんご。生産性の高い農家育成	35歳以下で農業だけで生計を立てたい人	0172-44-3001
	田舎館村	稲作文化のむら。水稲主作型とりんごの複合型	水稲単一経営から水稲＋野菜、花き等	0172-58-2111
	上北町	ヤマセに育む、いきいき農業をあなたも	稲作、稲作＋野菜、稲作＋畜産(肉用牛)	0176-56-3111
	東北町	みどりの大地とロマンの町、県内有数の農業地	根菜類主体の大規模経営、その対策が必要	0175-63-2111
岩手	江刺市	江刺金札米、陸中牛、江刺りんご等の銘柄地	稲作、肉用牛、りんご、野菜(トマト等)	0197-35-2111
	雫石町	山と牧場といで湯の町、はるかなる理想郷	野菜、米、楽産。受入れ可能な農地等が発生した時	0196-92-2111
	西根町	農業と工業の田園都市、標高270mの大地	水稲、酪農、肉牛、露地野菜、施設野菜	0195-76-2111
	紫波町	“紫波・フルーツの里”果樹を核とした農業	水稲、肉牛、養豚、果樹、野菜など	0196-72-2111
	東和町	消費者に喜ばれる低農薬農産物生産の町	水稲、畜産、果樹、野菜、花き	0198-42-2111
	湯田町	品質日本一“パープルりんどう”	研修生受入れ、花き生産(りんどう、ゆり)	0197-82-2111
	大東町	脱サラ、脱都会、自然志向派に	農業体験から農村生活全般の受入れ	0191-72-2111
	住田町	畜産団地の形成、新しい園芸作物の開発に努力	農業全般(農業で自立する意欲のある方)	0192-46-2111
	宮守村	「ワサビのもりづくり」みどり溢れる環境	しいたけ栽培、水稲、施設野菜、高原野菜	0198-67-2111
	普代村	北緯40度、自然と産業の体験の里づくり	野菜部門：2～3人(長期営農を志す方)	0194-35-2111
	野田村	太平洋に面した、水稲、野菜、花き、畜産地	野菜部門	0194-78-2111
宮城	村田町	畑作を核に水稲並びに酪農による有機農業	畑作(きゅうり、白菜等)＋水稲・酪農の複合	0224-83-2111
秋田	鹿角市 (有)大野台グリーンファーム	住みたいまち、住ませたいまち鹿角 集まれ！アグリアドベンチャー	畑作物、畜産、果樹等、60歳以下 花、野菜、酪農、畑作、就農志向従業員	0186-23-5111 0186-78-3583
山形	朝日町	どうぞ“地球にやさしい活力のまち”へ！	果樹(りんご)栽培、年齢、経験不問	0237-67-2111
	高畠町	まほろばの里の大地でのびのびと土の香りを	果樹部門(ぶどう)、農業で自立したい方	0238-52-1111
	羽黒町 (有)月山パイロットファーム	月山、湯殿山、羽黒山を有する修験道のメッカ 生協との契約栽培、野菜から漬物加工販売まで	水稲を柱に果樹、畜産、野菜などの複合化 一般野菜の栽培(有機栽培)、加工	0235-62-2111 0235-64-4791
福島	伊南村	自然に還れ 伊南家人／自分に還れ 田舎人	花き生産、南郷トマト生産部門、40歳位まで	0241-76-2111
	南郷村	生き(粋)生き(活)農業、住みたい郷づくり	トマト栽培、花き栽培	0241-72-2111
	中島村	住みたい村・住んでよかった村	水稲、花と緑化木、施設園芸など	0248-52-2111
	都路村	深いみどりと清らかな流れ、都路	畜産、花き、養鶏、野菜。おおむね45歳以下	0247-75-2111
長野	浪合村	自らの知恵と力で生き生きと暮らしませんか	トンキラ農園(法人)研修生、従業員、体験者	0265-47-2001
新潟	下田村	国営農地開発地で大型農業を！	畑作、畜産(国営下田農地開発事業造成地)	0256-46-2511
	津南町	広大な農地で思いっきり、自由に農業	畑作(一般露地野菜)、多少の経験者	0257-65-3111
	中里村	今、若い農業者の力の結集を進めています	水稲、稲作(花きを含む)各50aで各１名	0257-63-3111
	三和村	定住稲作経営農家を募集中	水稲(村の担い手として定着してくれる方)	0255-32-2323

アグリ・エイター募集中。

広大な大地で近代農業をめざす

北海道農業青年人材銀行（北海道農業会議）

米、小麦、大豆、ばれいしょ、牛乳などの農産物の生産量が全国第一位を占める北海道は恵まれた土地資源を生かして近代的で効率的な農業が行われ、農業者にとって魅力ある場所になっている。寒冷で積雪期間が長いなどの厳しい自然条件下にあるが、農業技術の導入により、気象条件を克服して安定的に経営する努力が続けられてきた。

また、明治以来開拓者を受け入れてきた風土だけに、開放的で、新規就農者たちに協力的である。

そんなわけで、北海道庁内にある北海道農業会議「北海道農業青年人材銀行」には、「新しく農業をしたい」という問い合せが最も多く、新規就農者を受入れている町村は65市町村に達している。

北海道青年農業青年人材銀行は、新規就農希望者に対し、ほぼ三つのパターンがあるとし、それに合った対応をしている。

①生産志向――農業で自立

②生活志向――自然との共存、生産は自給

③体験志向――数週間の農村体験

同所で相談・指導に当たる関廣司さんは「当所は農業青年との交流、Uターン、新規参入者受入れ等をめざして昭和45年に設置され、ました。

新規就農者は平成4年12月までに409名おり、この他に目下研修中の人達を入れるとかなりの人が、北海道での農業をめざして頑張っています。

農業で生活していくと計画し着々と準備をすすめていく人がいる一方で、いきなり旅行気分でやってきて、いますぐ農業をはじめたいという若者などもいます。北海道の自然に憧れて牧場などで働きたいという人が多いので、本気でやる気があるか、家族の理解や資金はどうなっているか等を見極めて対応する必要があります」

北海道農業青年人材銀行では、「新規就農ガイド」、新規就農青年の体験文集「緑むせる創造」などさまざまな資料を作成して、農業のイメージをつかみ、実現可能への具体的なプランを考えてもらうようにしている。

●農業開始にあたって、実現するため目安は、体験の有無・資金（当面一年間の生活資金、営農資金、農地資金）、労働力・健康の3点がポイントだが、意欲・意志の強さも大切。

●農業体験

短期、長期、女性の農村生活体験実習もある。特別研修機関として北海道立農業大学校（中川郡本別町）があり、Uターン、新規参入者を対象に研修を行っている。受講料は無料。

●各種の助成制度

・担い手確保農地取得合理化促進特別事業

農業公社が離農農家や規模縮小農家等の農地とそれに付帯する施設を一括して取得し、新規就農者にその土地等を一定期間貸し付けた後、その経営の安定を見極め、売り渡す。

・農場リース円滑化事業

公社が取得した離農農場や施設などを整備し、新規就農者等に一定期間リースしたのち、売り渡すもの。

●市町村別の施策

各市町村により多少の違いがある。例えば資格年齢も20歳～40歳、22歳～45歳他、配偶者や同居人がいることを条件づけている自治体もある。経営条件は、酪農・畜産では乳牛20頭以上、農用地15ha以上というように頭数や農用地面積にかなりの差がある。詳しくは北海道農業青年人材銀行か各市町村へ。

●問い合わせ　北海道農業青年人材銀行☎011(281)6767　道庁別館

道府県農業大学校一覧（平成4年4月現在）

農業の基礎知識と技術を習得、さらに高度な経営管理等を学ぶためには農業大学校で研修するのがいいが、最近、農業後継者や新しく農業を始める人を対象に3ヵ月、6ヵ月等の短期間の研修コースが開設された。千葉県農業大学校の例をとると、「基礎研修コース」（3ヵ月）、「専門研修コース」（6ヵ月）、「部門別研修コース」（12ヵ月）があり、研修費（入学金、授業料）は無料。教科書代、校外研修費は実費が必要。詳しくは、希望地区の大学校へ。

施設名	電話番号	施設名	電話番号
北海道立農業大学校	01562-4-2121	兵庫県立農業大学校	07904-7-1551
青森県営農大学校	0176-62-3111	奈良県農業大学校	07444-3-1551
青森県農業大学校	0172-52-4315	和歌山県農業大学校	0736-22-2203
岩手県立農業短期大学校	0197-43-2211	鳥取県立農業大学校	0858-45-2411
宮城県農業実践大学校	022-383-8138	島根県立農業大学校	08548-5-7011
秋田県農業担い手研修教育センター	0186-78-3244	岡山県立農業大学校	08695-5-0271
		広島県農業者大学校	08247-2-0094
山形県立農業大学校	0233-22-1527	山口県立農業大学校	0835-38-0510
福島県立農業短期大学校	0248-42-4111	徳島県農業大学校	0886-74-1026
茨城県立農業大学校	0292-92-0010	香川県立農業大学校	0877-75-1141
栃木県農業大学校	0286-67-0711	愛媛県立農業大学校	0899-77-3261
群馬県立農林大学校	0273-71-3244	高知県立実践農業大学校	0888-92-3000
埼玉県農業大学校	0492-85-4111	福岡県農業大学校	092-925-2403
千葉県農業大学校	0475-52-5121	佐賀県農業大学校	0952-45-2144
神奈川県立農業大学校	0462-38-5274	長崎県立農業経営大学校	0957-26-1016
山梨県立農業大学校	0551-32-2269	長崎県立農業経営大学校附属千綿女子高等農学園	0957-47-0230
長野県農業大学校	0262-78-5211		
静岡県立農林短期大学校	0538-36-0211	熊本県立農業大学校	096-248-1188
静岡県立高等農業学園	0544-54-0500	熊本県立農業大学校附属畜産高等研修所	0967-32-1231
新潟県農業大学校	0256-72-3141		
新潟県農業技術学院	0258-35-0047	大分県立農業大学校	09742-2-0670
岐阜県農業大学校	0574-62-1226	宮崎県農業大学校	0983-23-0120
愛知県立農業大学校	0564-51-1601	鹿児島県立農業大学校	0995-78-2814
三重県農業大学校	05984-2-1260	沖縄県立農業大学校	0980-52-0050
滋賀県立農業大学校	0748-46-2551	鯉渕学園	0292-59-2811
京都府立農業大学校	0773-48-0321	八ヶ岳中央農業実践大学校	0266-74-2111
大阪府農林技術センター農業大学校	0729-58-6551	日本農業実践大学校	0292-59-2002

人と自然の和ごみの里

散居村

富山県砺波平野

撮影／五島通弘

日本でも有数の米どころとして、またチューリップの里として知られる砺波平野は、一定の間隔を保ちながら民家が点在する独特の村落を形成している。三世代が同居する広い家屋と屋敷林。人と自然が長い歳月をかけて育んできた美しい風景を紹介する。

鉢伏山(510m)にある散居村展望台から見た砺波平野。6月。

子供獅子舞いが家々をまわって行く秋祭り(砺波市荒高屋)

散居村とは、日本農村の典型ともいえる〝集落〟とは異なり、水田をはさんで一定の間隔を保ちながら建つ村落のことで、富山県の西に東西約15㎞、南北約25㎞にわたって広がる砺波平野のことをいう。その大部分は平野の東端を流れる庄川によってつくられた扇状地で、富山コシヒカリ米の産地として知られる。

民家はほぼ100mほどの間隔をおいて建っており、家のまわりには〝カイニョ〟と呼ばれる屋敷林がある。カイニョは垣根という意味を持ち、春先きから初夏にかけて八乙女山(750m)や大寺山(915m)から吹き下ろす旋風や台風、吹雪などから家を守るために人々が築きあげてきた知恵。

強風に面する南西には杉、檜、欅、樫など背の高い樹木が植えられている。常緑樹は冬の寒さを防ぎ、落葉樹の葉や小枝は燃料として使われる。また、竹や柿、栗、胡桃(くるみ)、銀杏などは四季折々の実と糧を提供する。昭和30年代頃までは木は家の新改築用材に用いられてきた。

家屋は、白壁の土を走る格子の切妻と黒い瓦屋根が調和した「吾妻建(あづまだち)」の民家で、屋敷林と相まって独特の悠々とした空間をつくり上げている。

約四百年にわたって人々と自然が築き上げてきた散居村は、いま日本に残る最も美しい田園風景。

しかし、何一つ変わらないように見える散居村も、時代と共にさまざまな変化を遂げてきた。

近代建築の普及で、家の建材にカイニョの木を用いることは少なくなった。囲炉裏が消え石油ストーブやクーラーが登場した。

村の至るところを流れていた小川や畦道が年々消えていき、代ってコンクリートの用水路やアスファルトの農道が碁盤の目のように平野を走っている。

水田は圃場整備され、機械による農作業がごく当たり前になり、チューリップ畑に転作されたところも多い。

しかし、多くの人々は「先人たちの残してくれた緑の知恵を伝承し、世界に誇る景観を守り育てていこう」と考えており、昔ながらの行事や祭り、自然と共に暮らす質素で健康的な暮らしぶりなどの見直しが行われている。

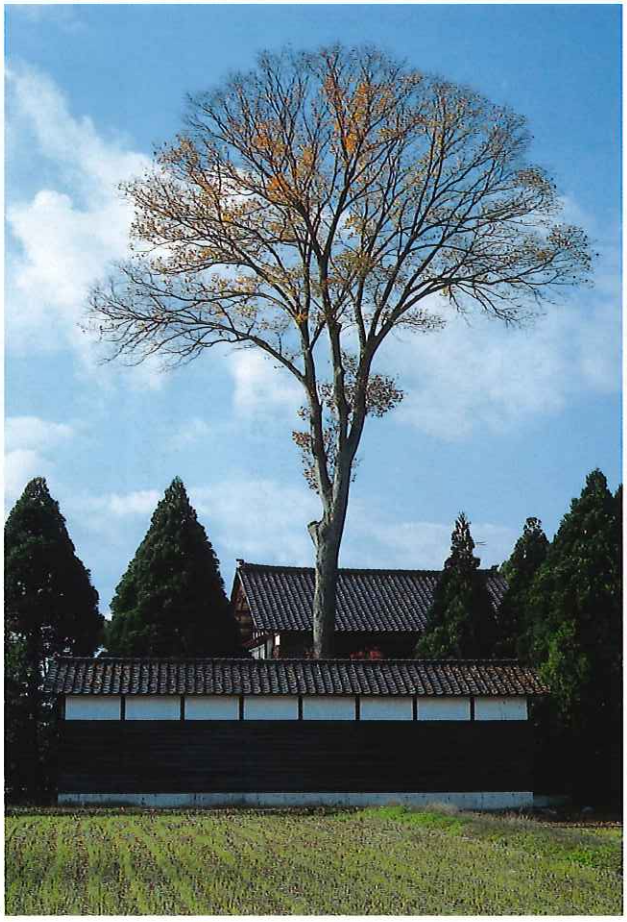
富山県は「住み続けたい」「住んでみたい」ふるさととして全国ナンバーワン。人々の故郷に対する愛着と誇りこそが、散居村をさらに永遠のものにしていくことだろう。

今では数少ない本物の小川、畦道は、子供たちにとっても楽しい遊びの場(庄川町金剛寺)

チューリップの生産地としても全国一。球根づくりは女性たちのきめ細かな労働で支えられている。

どの家も手入れのいきとどいた植栽が多く、秋は冬に向って囲いの準備で忙しい。

⬆晩秋の風物詩、とやま干し柿づくり(福光町、11月中旬)



➡樹齢150年位と思われる屋敷林の大けやき。

散居村の冬はモノトーンの美しい風景。しかし道路は除雪され、若い人は大抵勤めに出る。

やがてまた春。田圃はなみなみと水を張り、散居村は水の里となる。

秋は、砺波平野がとりわけ美しく活気に満ちた時でもある。子供達が村落の家々をまわって演じる獅子舞い（砺波市）など、各地区ごとに秋祭りで賑わい、農家は干し柿づくりや漬物、それが終わると植木の囲いなどで忙しい。

雪国、富山も、最近は暖冬続きで積雪は砺波平野ではせいぜい50、60cmほど。除雪も行きとどいて、雪による何の障害もなくなったが、しんしんと降る雪、風の音、屋敷林を棲家にする野鳥たちの声を聞きながらのんびり暮らす冬の生活の中で、人々は干麺、凍豆腐、工芸品などを作りながら春を待った。

やがてまた春がめぐってきて、雪溶け水が散居村の用水路を音をたてて流れはじめる。

5月、水を張った水田は、空をそっくり映し込んで、天と地が一つに溶け込んだように見える。

INFORMATION

ふるさと寄附金控除制度がスタート〈国土庁地方振興局〉

地方の人口減少が続く一方で、都市部に住む人々の「ふるさと志向」が高まっている。

それぞれの地域の市町村では創意工夫を凝らした町づくり・村づくりを進めているが、都市部などに住む人にも参加してもらうことでふるさととのきずなが強まり、地域づくりが一層促進される。

「ふるさと寄附金控除制度」は平成5年度税制改正により創設されたもので、都市部に住む人が地方公共団体に10万円を超えて寄附を行った時、個人住民税で控除を受けられるというもの。

・寄附金控除額＝寄付金の合計額－10万円（所得の25％相当額が限度）

応募者は、出身地や居住地に限らず、好みの〝こころのふるさと〟を持つことができる。

寄附されたお金は、交流イベントや森等の整備に活用される。

●問い合わせ／国土庁地方振興局過疎対策室03（3501）7369

「明日の過疎地域を拓く」イーハトーブからの提言

'93全国過疎問題シンポジウム

過疎地域の抱える諸問題について行政担当者や地域おこしの実践者、学識者らが一堂に会して情報交換し、魅力ある地域づくりの方策について討議を行う「'93年度過疎問題シンポジウム」は、10月27、28日の両日、岩手県花巻温泉で開催される。

今年の全体会のテーマは「明日の過疎地域を拓く――イーハトーブからの提言」。イーハトーブとは宮澤賢治の造語で〝理想郷〟の意。若者に地域の魅力を再認識させ、若い力を地域づくりに生かすためにどのように取り組んでいくか、各方面から提案、報告を行う。

基調対談は「炎立つ」（NHKドラマ）の作者高橋克彦氏。中央に対峙した平泉文化を通じ地方のあり方を考える。

パネルディスカッションには、「若者に魅力ある地域づくり」をテーマに、井上繁（日本経済新聞論説委員）、岩谷三四郎（広島県立大学教授）、岩手県早野田野畑村長、森谷地域づくりグループ等をパネリストに討議。

翌28日の分科会では「若者が担う地域づくり」、「山村の活性化をめざして」、「都市と農村の出会い」をテーマに、先進市町村長、学識者、マスコミ関係者らを招いて、具体的な方法論等を話し合う。

〈主催〉国土庁、岩手県、全国過疎地域活性化連盟

●問い合わせ／全国過疎問題シンポジウム実行委員会0196（51）3111　岩手県地方振興課内

編集後記

▼地方の取材から戻ると、いつも東京のせせこましさや騒々しさにウンザリする。何というとんでもないところに自分は暮らしているのだろうと呆れ返る。そして気がつくとそのとんでもなさにまた馴染んでいる。でも、いつかはきっと東京を出ていくゾ。（K）

▼都市生活を捨て、あえて山村での農業を選んだ人達は、みないい顔をしていて魅力的だ。農業や自然との共生に一つの信念と価値観、ロマンを持っているからだろう。農業で食べていくことは大変だが決して不平不満を言わず、大地で穫れたものを生かし楽しむ方法も身につけている。このような「新しい農民」が今後の村おこしや農業の発展に大きな力になっていくに違いない。各地で頑張っている新農民の方々に心からの声援をこめて、本誌をお届けします。（A）

でぽら

No.5（'93秋冬号）

発行日／平成5年9月15日

発行所／全国過疎地域活性化連盟

〒100 東京都千代田区永田町1-11-35

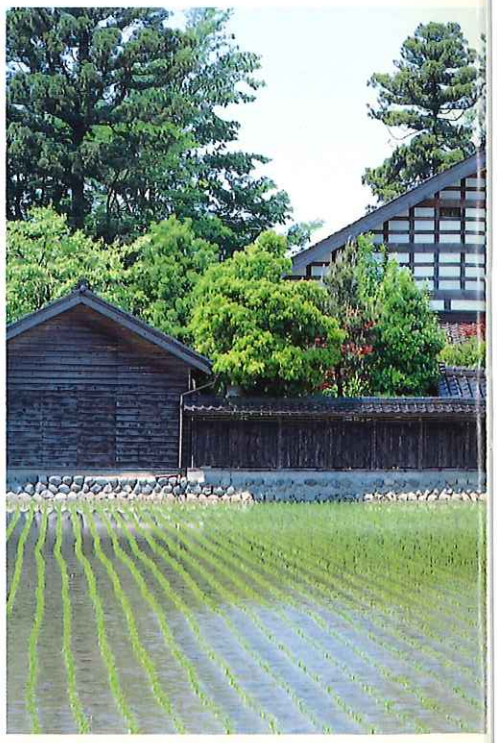
全国町村会館6階 ☎03（3580）3070㈹

編集協力・印刷／㈱ぎょうせい

■協力／㈶地域活性化センター

全国農業会議所

初雪の日（中島家/砺波大門）、12月上旬。



でぼら NO.5
平成5年9月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟
〒100 東京都千代田区永田町1-11-35 全国町村会館6階 ☎03(3580)3070代

宝くじのもうひとつの顔は。

みなさんに「夢」をお届けしている宝くじですが、
もうひとつ顔があります。「収益金」です。
収益金は各地方団体に納められ、
公共事業の財源として地域社会のお役に立っています。
宝くじはこれからもみなさんと一緒に、
本当の豊かさを表現していきます。

宝くじ
財団法人 日本宝くじ協会

（本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです）